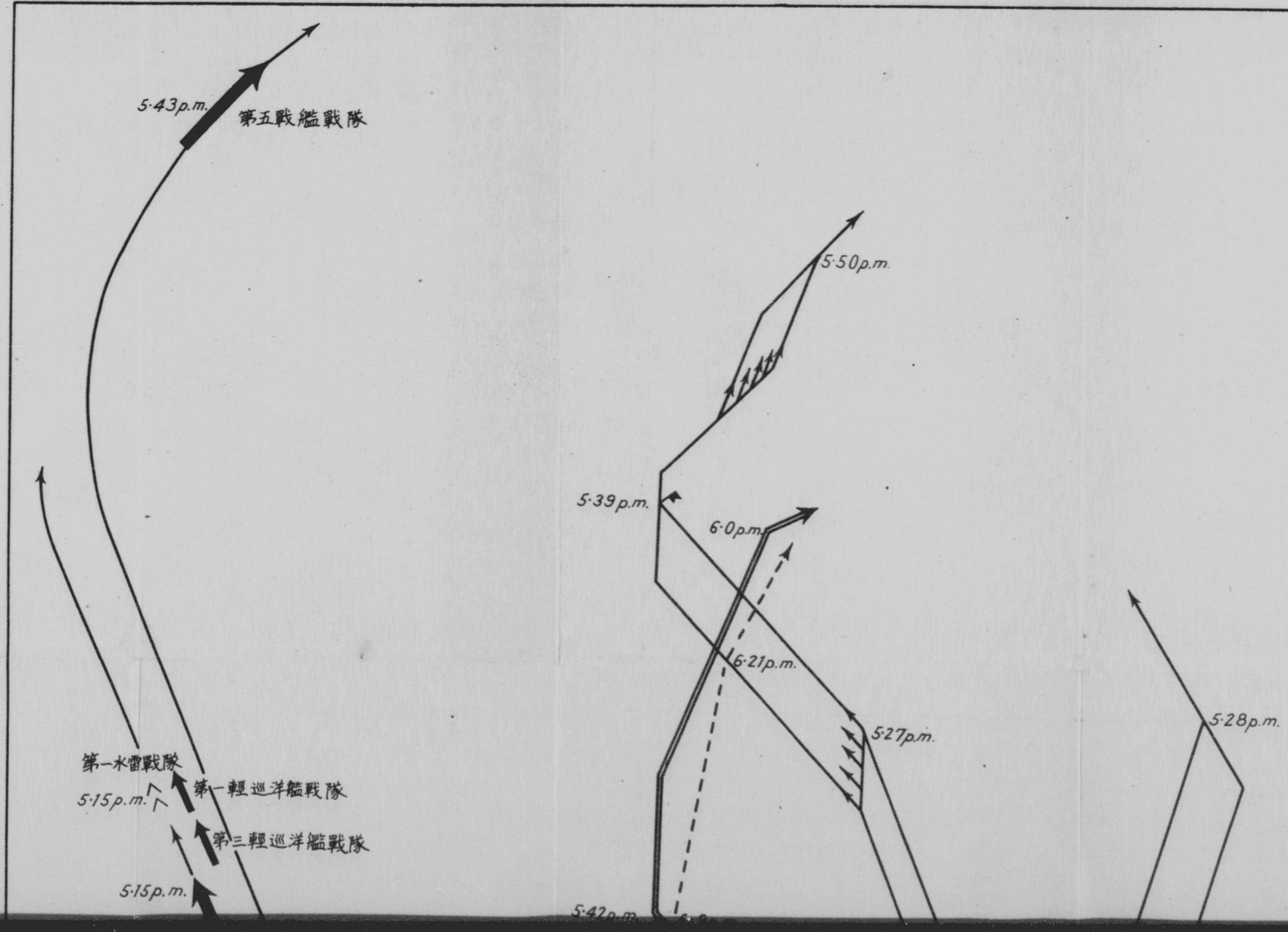
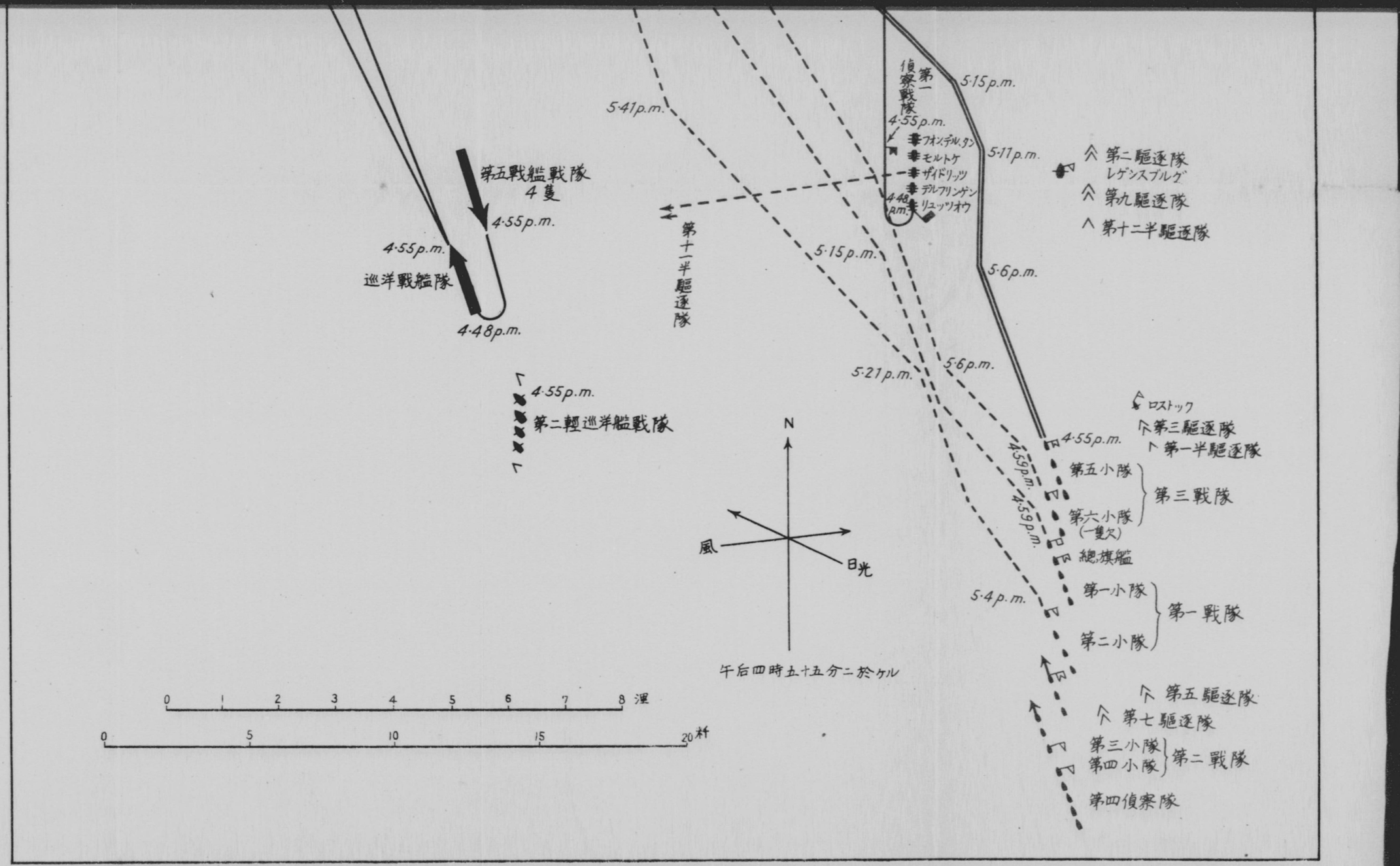
第二期合戰圖

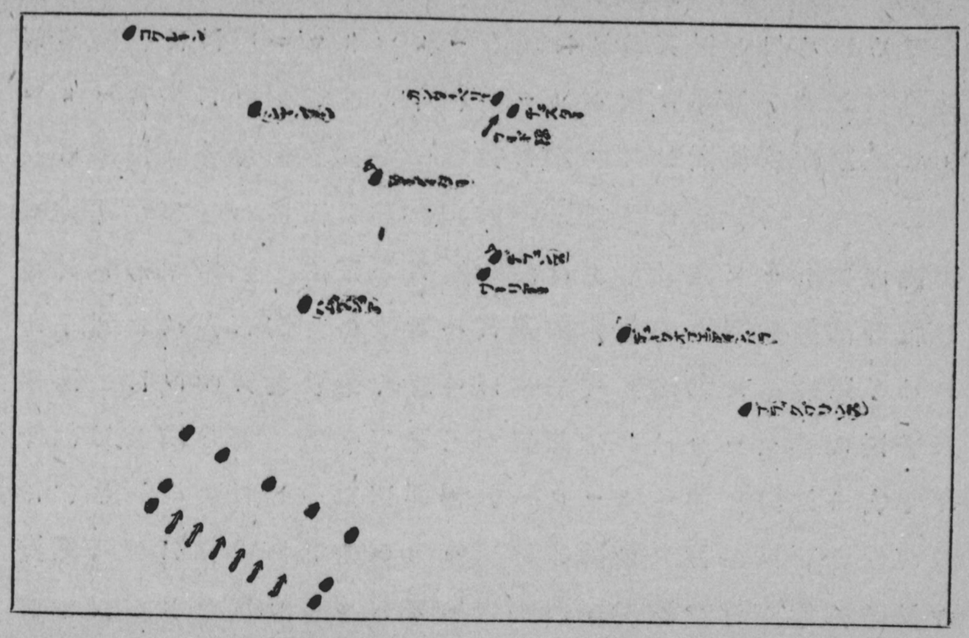

5·43p.m.
第五戰艦戰隊
5·50p.m.
5·39p.m.
6·0p.m.
6·21p.m.
5·27p.m.
5·28p.m.
第一水雷戰隊
5·15p.m.
第一輕巡洋艦戰隊
第三輕巡洋艦戰隊
5·15p.m.
5·42p.m.

第一水雷戰隊
5·15p.m.
第一輕巡洋艦戰隊
第三輕巡洋艦戰隊
5·15p.m.
巡洋戰艦隊
第二輕巡洋艦戰隊
第十三水雷戰隊
5·15p.m.
第五戰艦戰隊
6·21p.m.
5·27p.m.
5·28p.m.
5·42p.m.
6·9p.m.
6·2p.m.
5·43p.m.
5·46p.m.
5·12p.m.
5·8p.m.
5·52p.m.
5·30p.m.
第二偵察戰隊
4·58p.m.
5·41p.m.
5·15p.m.
第一偵察戰隊
4·55p.m.
フオンデル・タン
モルトケ
ザイドリッツ
デルフリンゲン
リユッツオウ
4·48p.m.
5·11p.m.
第二驅逐隊
レゲンスブルグ
第九驅逐隊
第十二半驅逐隊
第五戰艦戰隊
4隻
4·55p.m.
4·55p.m.
巡洋戰艦隊
4·48p.m.
第十一半驅逐隊
5·15p.m.
5·6p.m.
5·21p.m.
5·6p.m.
4·55p.m.


第五戰艦戰隊
4隻
4·55p.m.
4·55p.m.
巡洋戰艦隊
4·48p.m.
第十一半驅逐隊
5·41p.m.
偵察戰隊
4·55p.m.
4·48p.m.
フォンデル・タン
モルトケ
ザイドリッツ
デルフリンゲン
リュッツオウ
5·15p.m.
5·11p.m.
5·6p.m.
5·15p.m.
5·21p.m.
5·6p.m.
第二驅逐隊
レゲンスブルグ
第九驅逐隊
第十二半驅逐隊
4·55p.m.
第二輕巡洋艦戰隊
ロストック
第三驅逐隊
第一半驅逐隊
4·55p.m.
4·59p.m.
4·59p.m.
第五小隊
第六小隊
(一隻欠)
第三戰隊
總旗艦
5·4p.m.
第一小隊
第二小隊
第一戰隊
第五驅逐隊
第七驅逐隊
第三小隊
第四小隊
第二戰隊
第四偵察隊
N
風
日光
午后四時五十五分ニ於ケル
0 1 2 3 4 5 6 7 8 浬
0 5 10 15 20 粁

（第四図）

英軍主隊合同後の戰況



容易なるスカゲラックに向ふならんと判斷したるを以て、之を遮斷するに好位置に在るフード隊に電命し、此獨艦の退路を斷たしめんとしたが、午後四時改めてビーティ隊を援助すべきを命じた、前述の敵情判斷に對する處置としてフード隊を東方に派遣したことは聊か鷄を割くに牛刀を使用した嫌が無いでもない、而して次に述ぶるが如くに午後三時十分に敵艦見ゆとの警電に接しながら、同四時に至るまで約一時間フード隊を依然東航せしめたる處置は敏活を缺くの嗟りを免れない。

午後三時十分敵艦見ゆとの報に接したる英軍司令長官ジェリコーは直に合戰準備を令しビーティ隊と合同の爲め二十浬に增速した、之よりジェリコーの得た敵情は左の二であつた。

一、午後三時四十五分ビーティより
我位置北緯五十六度五十三分、東徑五度三十三分、敵の針路南五十五度東

二、午後三時五十五分ビーティより
我位置北緯五十六度五十三分東徑五度三十一分、交戰中

右の如くジェリコーの直接接受したるは二項に過ぎぬが其外此前後に於てビーティ麾下の諸隊間の通信を傍受したるものもあらんと信ずるが、其れは第一一六頁及び第一一七頁に記したるもの〻外は不明である。

之より先き主隊の前方二十浬に占位せる第三巡洋戰艦戰隊（フード隊）は輕巡洋艦チエスターをしてフード隊に續航せる巡

洋艦戰隊との連絡に任じ、同カンターベリーを正横に配し南下中なりしが、同隊は午後二時四十五分第一輕巡洋艦戰隊(ビーテイ隊附屬)より北緯五十六度五十二分東徑五度三十五分の地點に於て、北上中なる敵艦見ゆとの報に接したるを以て之を遮斷する爲め轉向し、ジエリコー隊の針路より東方に逸脫し在りしが、午後四時五分南方約六十浬、北緯五十六度五十三分東徑五度三十三分の地點に於て、交戰中なるビーテイ隊に赴援すべしとの命を受け、且つ敵の針路は午後三時五十分には南五十五度東なりとの通報ありしかば、同隊は南微東に變針し全速急航した。

午後四時十五分フード隊より、我位置は北緯五十七度三十九分東徑五度三十五分、針路南々東速力二十五浬にて急航中との

報があつた。

而して午後五時三十分に至りフード隊に續航せる輕巡洋艦チエスターより(當時同艦はフード隊の北七十度西五浬に占位せり)探照燈信號にて同艦は南西に砲聲を聞き且發砲の閃光を認めたるを以て之を偵察する爲め南西の方向に變針したとフードに報じ來た、而して同艦(輕巡洋艦チエスター)は午後五時三十六分數隻の驅逐艦を伴へる一隻の獨輕巡洋艦二檣三煙突を認めたので、約五千四百八十六米突の距離で交戰したが、間もなく獨艦には二三隻の輕巡洋艦の增援を見たので北東方に變針したが、獨戰隊之を追擊し來つたので勘からず損傷を受けた。

午後五時四十分まで南々東に進航中なりしフード隊は、西方

に獨巡洋艦數隻を認めたるを以て西北西に變針した。

司令官フードは主隊と巡洋艦戰隊との關係位置推算上の差異に因り、指導を誤り、遠く東方に進み過ぎ、事實上交戰中なるビーテイ隊の前方を横過し、後遂に獨軍の前進巡洋艦數隻に出會するに至つたのだと云ふ。

午後五時五十二分フード隊及輕巡洋艦カンターベリイは獨の輕巡洋艦三隻(獨の第二偵察戰隊ならん)がチエスター及英驅逐艦アカスタ、シャーク、オフエリア、クリストファー等を砲撃しつゝあるに出會し、該獨艦等と交戰し午後六時其一艦を撃沈した、此時英軍に在りてはシャークを失ひアカスタは大損害を受けた。

北西方に航進中のフード隊は午後六時十分に至りビーテイ隊を發見し、同六時二十一分ビーテイの命に依り其旗艦ライオンの先頭に占位した、而してチエスターは當時より第二巡洋艦戰隊の後尾に占位し終夜同隊に隨伴した。

此の如くしてフード隊はビーテイの麾下に復歸し旗艦ライオンの前方に占位し、ヒツペル隊の嚮導艦デルフリンゲルと九千乃至七千三百米突に接近し交戰しつゝあつたが、午後六時三十分其旗艦インヴキンシブルは轟沈せられたので、ビーテイは旗艦ライオンをして嚮導せしめ、フード隊をビーテイ隊の後尾に就かしめた。

之より先き又主隊の前方十六浬に捜索列(列の中心はジエリ

コーの旗艦アイヨン・デュークより南東微南の方位に在つた)を張りて南下中の第一第二巡洋艦戰隊は午後五時四分接近占位せよとの命を受けたが、午後五時四十分マイノーターは其前方に於ての重砲砲聲を聞き(直に南方に砲聲を聞く旨ジエリコーに報告した)間もなく濛氣の中に其艦影を認めたので之に挑戰した。

僚艦コクレーン及シャンノンの二艦を召集し、戰闘旗を掲げ戰列を形成したが、當時如何に濛氣深かりしとはいへ、マイノーターが挑戰せし艦は僚隊たるフード隊であつたとは、英軍に識別信號の不充分であつたことが證明せられる、而して第二巡洋艦戰隊は東方に向ひ獨敷設艦の警戒に任じた。

又第一巡洋艦戰隊のブラック・プリンスは午後五時四十二分次の如き報告を致した。

我位置北緯五十六度五十九分東徑五度四十二分、獨巡洋戰艦戰隊を南方五浬に認むと。

次で五時四十六分には第一巡洋艦戰隊より次の如き報告があつた。

我今北緯五十七度七分東徑五度三十八分に在り南々西の方向で交戰中の敵艦は北東に向ひつゝありと。

第一第二巡洋艦戰隊の數艦は午後五時五十五分頃獨輕巡洋艦ウイスバーデンと衝突したので之と砲戰中、濛氣の中より忽然獨ヒツペル隊を近距離に發見したが、當時右翼に在つた第一

巡洋艦戰隊は退却の途なく其猛火に浴し、同六時十六分デフェンス、ブラック・プリンス相續で擊沈せられ、ウォーリアーは大損害を蒙り、運轉不能となり後遂に沈沒した。

之れより先英軍主隊(ジエリコー隊)は南下中午後五時北緯五十七度二十四分東經五度十二分の地點に達し南東微南に變針した、午後五時四十五分砲聲を聞き、同五十五分艦首より右舷正横の間に於て發砲の閃光を認め、次で第一第二巡洋艦戰隊が敵と戰ふを見、次で信號で其の敵として居るのは輕巡洋艦だと云ふことが分つたが、濛氣深く其艦影を見ることが不可能で、從て獨主隊の所在を確認するに由なかつた。

此の如くして英主隊は午後六時には北緯五十七度十一分東

經五度三十九分に達した。

之より先き午後五時ジエリコーは同時刻に於けるビーテイ隊の旗艦ライオンの位置は北緯五十六度四十二分東經五度四十四分に在りて、北々西に向ひ二十五浬の速力で北上中だと推測して居つたが、實際はジエリコーの推測したものよりも東方約十二浬に偏して居つたことが後に明瞭となつたが其原因を公表して居らぬ。

此の如く推測位置に誤差があつた爲め、ビーテイ隊も其の觸接して居た獨主隊の位置も共に不明で、ジエリコーは獨主隊は英主隊の前方に出現するものと豫期して居たが、實際は豫期に反して右斜前に現はれ而かも時間の上では豫期よりも二十分

も早かつた、其時の狀況を次に詳述しよう、午後五時四十五分戰艦マルボロー(右翼列の嚮導艦)は南々西に方りビーテイ隊が猛烈なる砲火を交換しつゝ東航し居るを見、又第五戰艦戰隊を南西方に發見したが、此報告は午後五時五十五分にジエリコーに達した、此時マルボローの位置は北緯五十七度四分東徑五度二十九分であつて、ビーテイ隊は南々西三四浬の距離に在つた。

之と同時にビーテイより敵情に關する報告が在つた、曰く。

獨ヒツペル隊は我が南方に在り

と、次で午後六時十四分に

我(ビーテイ隊)は獨主隊の南々西に在り

との報告があつたが此時の狀況を英公報には次の如く簡單

に述べて居る、曰く

當時ジエリコー隊の旗艦アイヨン・デユークとビーテイ隊の旗艦ライオンとの推測位置に相違ありし爲め彼我の位置に關する疑惑は一層深きを加へた、尙合同に際しては彼我の誤認を避くる爲め尠からず苦心を要したと。

當時英軍に在りては艦位を確定してより少くも十八時間漫漫たる北海の洋心に馳驅して居たから、主隊もビーテイ隊も其位置が正確なりとは言ひ難い、此の如く艦位の正否が嗣後の作戰に齟齬を來すものであり、殊に濛氣が深く展望不良の時は一層甚しいから、艦長たるものは羅針儀の修整は勿論機關の回轉數と實際速力の關係等に就て不斷の研究を積み萬一の際遺憾

なきを期して居らねばならぬ。

午後六時戰場に到着せるジエリコーが直に解決を要すべき當面の問題は艦隊の戰闘展開を艦隊の右翼に爲すべきか、又は左翼に爲すべきかに在つた、而して戰勢は一刻も速に主隊の參戰を要して居つた。

然れども如何せん、展望不良であり且友軍の情況も亦敵情も共に不明で稍々正確なる報告を得たのは前述の如く午後六時十四分であつたので、ジエリコーは戰闘展開を令するに不利であつた、而して彼我主隊が殆ど相接觸するに至るまでは、正確に展開方位を決することは眞に困難であつた。

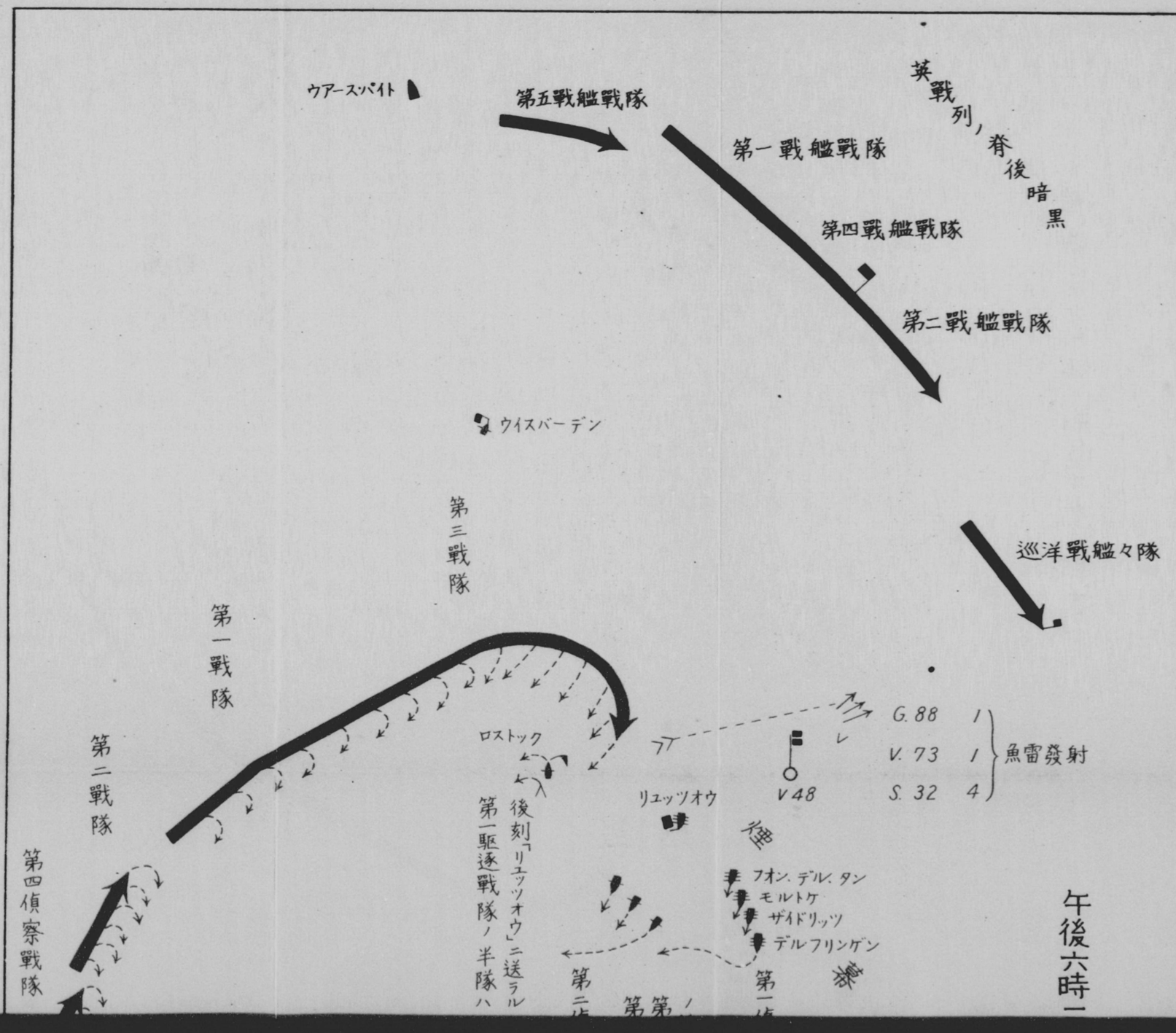
之より先きジエリコーは獨主隊は英主隊の前方に在るものと思ふて居たが、前進せる巡洋艦の戰隊は前方より右舷正横に亙り激戰中なのを見て、或は獨主隊は自隊の右舷正横に在るとも考へた。

左れば午後六時二分南に變向し、十八浬に減速し、各艦を接近せしめ獨軍の針路は略ビーテイ隊と同一なるべき判斷の下に一旦右翼展開の信號を揭げ既に運動中で在つたにも拘らず之を中止し、午後六時十六分均一の速力を以て左翼列を先頭とする戰闘展開の信號を揭げ、右舷正横に在りしビーテイ隊の先頭占位を容易ならしむる爲め十四浬に減速した。

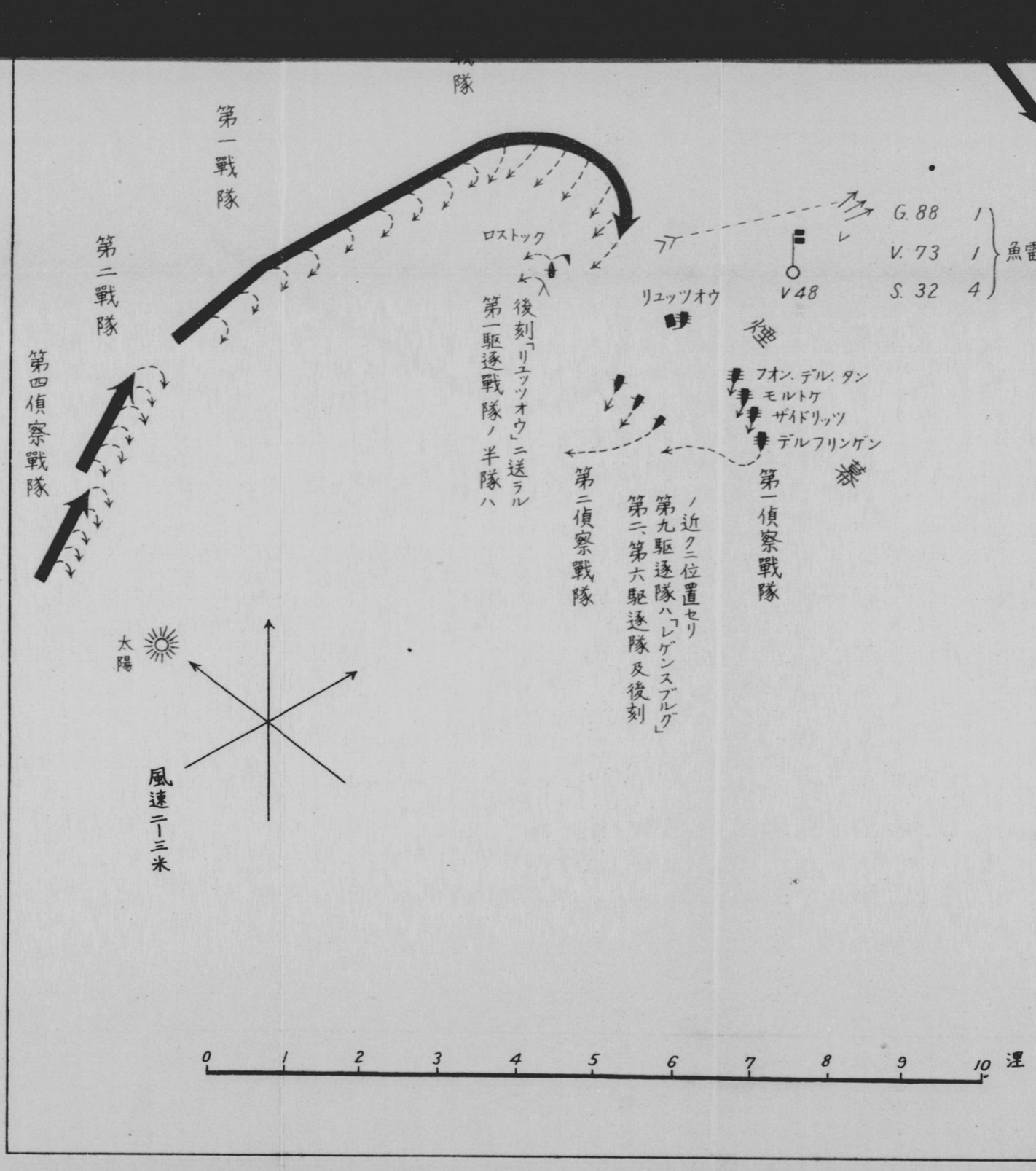
然るに當時展望不良であつた爲め、其信號容易に全軍に到達しなかつたので、一時隊列の混亂を誘起するに至つた。

此展開運動中戰鬪序列の西端(右翼列)に占位せる第一戰艦戰隊の旗艦マルボローは、獨第三戰艦戰隊の一艦カイゼル型に向ひ一萬六十米突の距離にて發砲を開始し、各艦之に倣ひ距離次第に減じて八千二百三十米突に及び、午後六時十五分獨軍の齊射彈は同戰艦の三番艦ハーキユールスの前艦橋附近に落着した。

時に獨軍に在つては、巡洋戰艦は、四隻のケーニヒ級戰艦(第三戰艦第五小隊)、四五隻のカイゼル級戰艦(第三戰隊第六小隊)及四隻のヘルゴランド級戰艦(第一戰隊第一小隊)の先頭に立ち東航しつゝあつた、爾餘の諸艦は彼我諸艦と相重疊して英軍よりは之を視認することが不可能であつた。


ウアースパイト
第五戰艦戰隊
英戰列ノ脊後暗黒
第一戰艦戰隊
第四戰艦戰隊
第二戰艦戰隊
ウイスバーデン
第三戰隊
第一戰隊
第二戰隊
第四偵察戰隊
ロストック
後刻「リユツツオウ」ニ送ラル
第一驅逐戰隊ノ半隊ハ
巡洋戰艦々隊
G. 88 1
V. 73 1
S. 32 4
魚雷發射
レ
V48
リユツツオウ
フオン、デル、タン
モルトケ
ザイドリッツ
デルフリンゲン
午後六時一

午後六時三十五分頃ニ於ケル合戦圖



（第五圖）

ピーテイ隊は主隊の參戰を速かならしむる爲の全速力にて東航中にフード少將の率ゆる第三巡洋戰艦戰隊が來援したので、午後六時二十一分之に先頭占位を命じた、フード少將は巧に其運動を了し、邁進七千三百十五米突に接近し、先頭を壓迫し西方に回頭するの止むを得ざるに至らしめたが、午後六時三十分砲戰未だ數分ならぬ內に、其旗艦インヴキンシブルは獨軍の集中砲火を蒙りて爆破顚覆した、此に於てピーテイはフード隊に後尾に占位を命じた、而して又ピーテイ隊は此時主隊の先頭に占位するを得速力を十八浬に減じた。

之より先きピーテイ隊の戰鬪側先頭に占位しありたる第三輕巡洋艦戰隊は午後六時二十五分獨軍の前方より雷撃を決行

し、ファルマス及ヤーマスの二隻はリユッツオウを雷撃し、次で其大艦と戰ひしも、少しも損傷を受けなかつた、當時獨ヒッペル隊に在りては旗艦リユッツオウは巨砲彈十五發を受け、甚しき損傷を蒙りて落伍し、火災を起し全艦煙に包まれ、艦は一方に傾き又其艦首は深く沈下し、司令長官ヒッペルは驅逐艦に依りてモルトケに移乘した、故に午後九時頃まで暫くの間同隊はデルフリンゲル艦長に依りて指揮された。

之れより先き、ヒッペル隊はビーテイ隊の東南東に於て漸次南方に回頭し、續いて六時三十五分に西方に變向した、此頃獨軍の嚮導艦リユッツオウも三發の巨砲彈を受け可なりの損害を蒙つて居つた、フオン・ハーゼに從へば、デルフリンゲルでは總て

の索具及空中線は切斷せられ、無線電信機は辛うじて僅に受信用に便するのみで、主砲彈一發は艦首なる二枚の水線甲帶を劈き恰も水線に於て、六×五米突大の裂口を穿ちしかば、艦の縱動する毎に海水は絕えず浸入した。

午後六時過濛氣の裡に漸く合同を遂げたる英大艦隊は同六時三十分に於て展開を終り十七節に增速し、大體に於て、ビーテイ隊、フード隊、ジエリコー隊、第五戰艦戰隊の順序に北東より南西に向ひて半月形に配列し、獨軍を掩撃せんとした。

時に濛氣濃密を加へ、煤煙四方に靉きて展望頗る不良なり、英軍の報告に據れば、先頭隊の同時に視得たる敵艦は僅に四五隻

に過ぎず、殿隊は稍々多數なりしも尙八隻乃至十二隻を出でなかつた。

シエーアに從へば、午後六時過ぎには英軍は濛氣及煤煙に蔽はれ、西方より之を通視するに至難であつたが、西方水平線に對する展望良好であつたので、彼我砲火の効力に關しては、英軍は天象上有利なる對勢にあつた。

故に彼は南方の針路で並航戰を持續せば大に不利であると考へた、而してシエーアは前方に在つた友軍の巡洋艦を視認することが不可能であつたので、若しシエーア隊が正面變換を行はば益々該巡洋艦と英軍との距離を短縮し、且之を彼我主隊の中間に占位せしむる如き對勢になる惧があるから、午後六時三

十五分折柄獨軍は曲列なりしにも拘らず、齊動を以て西方に變針した。

此運動中第三驅逐隊の二隻（G八八號V七三號）及第一驅逐隊の嚮導艦S三二號は英軍を襲撃した、シエーアは英軍が獨軍の運動に即應して西轉し其先頭を壓したならば確實に包圍攻撃を繼續することを得たるならんに、其擧に出でなかつたのは、ジエリコーが戰勢を洞察する明がなかつたのか、或は雷撃を恐れて距離の短縮を圖らなかつたのであらうと言ふて居る、吾人は思ふに恐らく後者ならん乎。

註　獨軍は同じ樣な運動を前後二回も行つた、其第二回は午後七時十七分頃で逆轉毎に獨軍は魚雷攻撃を行つたが、第一回は午後六時三十五

分頃第三驅逐隊が英軍に對して發射せる魚雷は僅に六發で驅ヶ第四八號は英の重砲彈で擊沈せられ第二回は前述の如く午後七時十七分で此時は猛烈な襲擊を行ひ第十七及第十一驅逐隊の各半隊で合計二十二發の魚雷を發射したが孰れも命中はなかつた。

獨軍は偵察巡洋艦の報告に依り英軍主力の接近を豫期したるもの〻如く、漸次南方に變針し、同心圈の內圈に據りて對勢の優位を維持せんと努力したもの〻如く、又之と同時に煙霧に乘じて連續數回に亙り水雷戰隊の强襲を行ひ、此時獨軍は驅逐艦をして特に噴出せしめたる濃厚なる煤煙を利用して其踪跡を晦し、英軍と離隔せんと試みた如くであつた。

此海戰後ジエリコーは非難の焦點となつた、ジエリコーは終にグランド・フリートと命名せる一書を著述し、彼自身の辯護に

力めた、而して其非難は此海戰に於ける指揮統帥の拙劣なりし點より牽ては往時軍政の局に當り居りし時代施設宜しきを得ざりし點にまで及んで居る、然れども要するに此海戰に於て英軍は大勝を博すべしと信ぜし英國民の期待に副ざりし一點に出發して居る、其內具體的のものとしては三十一日の午後六時戰場に到達せし英軍が日沒に迫り一刻も速に參戰すべかりしに、彼は左翼に戰鬪展開を爲したる爲め敵に遠ざかり、參戰の時間が少くも三十分遲延し、從て日中に決勝的の大打擊を與へ得ざりし點に在る、之に對しては彼は、成るべく速に發砲を開始し得る樣右翼に展開する方が宜しいのは明白であるが、獨軍は必ず水雷戰隊を其先頭に集中して居て、英軍が展開中に之を强襲

するであらう、英軍の右翼列には比較的劣勢なる戰艦が編組されて居たし、英軍には何等豫備兵力なく、其損失は曾に英國のみならず聯合與國の存亡に關する重大事なる等を顧慮し、遂に左翼展開に決したのだと辯じて居る、ジエッコーが消極的で獨軍の水雷戰を非常に顧慮して居た點は遺憾であるが、當時の氣象等に鑑みればジエリコーの執つた行動は已むを得ざるものとも考へられるのである。

抑々ジエリコーは何故に屈伸不自在なる複列の陣列を以て戰場に進入したか、元來橫陣列と縱陣列とには一利一害があつて橫陣列は展望良好で敵出現の方向を豫知し得る場合には展開が迅速に行はれ一齊に戰鬪力を發揮するに適するが、然らざる場合は方向の變化が困難で所要の戰鬪正面に展開することが容易でない、縱陣列では之と反對である。

而してジエリコー小隊單位の六列の並縱陣列を用ひた理由は判明しないが、此形隊では各列の嚮導艦の方位線を敵の方位線に直角ならしむる如く指導することが必要で、若し此の如き狀況で展開する場合には各列の嚮導艦の一齊回頭に依り自餘の諸艦は各々其嚮導艦の通跡を進み、其實施頗る容易で迅速に艦隊全砲火を發揮することが可能である。

今優勢なる第二戰艦戰隊を左翼に置いてある艦隊編成の上からジエリコーの意圖を考察してみるに、敵狀から判斷し多くの場合南方より東方に亙る方面に敵を發見するものと判定し、

小隊單位の六列縱陣を基本とし、各嚮導艦を東西線に保持し、敵狀に應じ一列に展開し、右翼戰鬪を以て敵に同航戰を强ひ、一戰で之を擊滅せんとする計畫であつたのであらう。

然し戰場に臨むに當りては如何なる陣列を用ふべきやは天象氣象地形等に依りて決すべき問題で、此海戰に於ては濛氣深く展望不良なりしにも拘らずジエリコーは依然として六列の縱陣を採用して戰場に進入したのは、當時の氣象と敵狀とに鑑み適當とは認め難い、故に其戰鬪展開の爲め參戰が遲延したのみならず、又戰鬪に際しても味方の戰隊が重疊して、爲めに砲力の發揮を妨げたのは、決して偶然ではない。

是れより先き、ビーテイ隊と終始連繫行動せる第五戰艦戰隊

は、前續隊の全速東航するに及び、漸く後れ勝となつたが、午後六時六分に至り司令官トーマス少將は左舷前方に戰艦戰隊の右翼小隊のマルボローを發見し、後數分ならずして同小隊全部を認めしも、其餘の小隊を發見せざりしかば、主隊は右翼に展開し、マルボローが全隊を嚮導し居るものと誤解したるを以て、マルボローの先頭に占位せんと決心せしも同六時十八分に至り初めて殘餘の諸艦を認め、ジエリコー隊は左翼に展開せしを知り、當初の企圖たる先頭占位の不可能なるを知り之を斷念し、獨戰艦戰隊の猛射に浴しつゝ轉針し、同六時三十八分ジエリコー隊の殿位に就いた、此回頭中ウアースパイト（第五戰艦戰隊の殿艦）は集中砲火を蒙りて舵機に故障を生じ舷柄一時一方に固着せる爲め、列

外に出で敵方に走るの不得止に至り、益々敵の砲火を受けしも克く危地を脱し、微速力を以て根據地に向ひ、爾後同艦は戰鬪に參加しなかつた。

初めジエリコー隊が展開を終り依然南東微東の針路を採り航進を續けつゝありしが、中央に在りし第四戰艦戰隊の第一小隊は濛氣を透して、ケーニヒ級及カイゼル級の戰艦巡洋戰艦並に進退の自由を失へる大小巡洋艦を攻撃し、旗艦アイヨン・デユークは午後六時三十分に至り距離一萬九百七十米突にてケーニヒ級の一戰艦を砲撃し有効なる命中彈を得たり、其他の諸艦は主として濛氣の間に隱見する巡洋戰艦及巡洋艦を砲撃しつゝありしが、漸次獨軍に離隔するを以て、午後六時五十分各小隊

毎に一齊に南に變針、再び六列の並縱陣となりて敵に近づかんとした、午後六時五十四分マルボローは其右舷側(前部水壓機室)に魚雷を受けて艦體傾斜せしも尙十七節の速力を保持しつゝ、依然隊列中に在りて戰鬪を繼續し、ケーニヒ級の獨艦を猛撃して列外に出でしめた時に濛氣益々深く風向は西南西にして其力三米に及んで居た。

此時英軍主力の先頭に占位せし第二戰艦戰隊は午後六時三十分より七時二十分までカイゼル級若はケーニヒ級の戰艦數隻と戰ひ、尙大損害を蒙りて落伍せしと覺しき一巡洋戰艦を砲撃した、

英軍は午後七時五分更に南西微西に變針した、變針後間もな

く午後七時十四分頃英軍に於て獨の數艦を視認するを得しが當時獨軍は單縱陣にして其針路南微西なりしもの〻如く、旗艦アイヨン・デユークの左舷艦首に當り獨潛水艦を發見し、次で同七時二十三分獨の一水雷戰隊が同じくアイヨン・デユークの南五十度西に當り接近し來るを認め、左二點の變針を行ひしも、之を回避するに不充分なりしかば、更に左二點の變針を行ふた、而して此運動の爲め距離は更に千六百米突を增加するの已むなきに至つた、依て十分後には原針路に復した、同七時二十五分獨驅逐艦現はれしも、英の第四輕巡洋艦戰隊は之を擊退した、而も獨軍は濛氣と砲煙と煤煙とを利用して約八點の變針を行ひ遂に英軍より離脫した。

英軍は午後七時三十三分左轉して單縱陣列となり、南微西に向ひ、次で同七時四十一分南西に正面を變じたるにビーティ隊より獨軍はビーティの旗艦ライオンより北西微西約十乃至十一浬に在り、ライオンの針路は南西なる旨の報が有つた、當時ジエリコー隊よりは濛氣の爲めライオンを視認する能はざりしも、ジエリコー大將は其位置はジエリコー隊の先頭約五六浬と推定したので、午後七時五十九分各隊一齊に西に變針し、之に近づきしも敵を發見せず、午後八時二十一分南西に變針し、同二十五分北西に向ひ、同三十分左轉して單縱陣列となり、南東に定針し、同九時南に變針した。

合同後に於けるビーティ隊の行動に就て詳述せんに、同隊は

午後六時五十分北々西三浬に在りしジエリコー隊の前方を航過すると同時に、十八節に減速し、第三巡洋戰艦戰隊フード隊をして後尾に就かしめ、時々濛氣の間に隱顯する敵に對し攻擊を續行した、午後七時より七時十二分に至る間漸次南西微西に變針獨軍に觸接を圖りありしが、七時十四分巡洋戰艦二隻ケーニヒ級と見えたる戰艦二隻を約一萬三千七百米突に發見し、折柄展望の良好なるに乘じ、速力を二十七節に增加し之と交戰した午後七時三十二分針路南西に變じ速力を十八節に減じ、獨戰艦を北西微西に望む頃より、砲火の威力漸く現はれ、獨軍の一艦火災を起し他の一艦は落伍せるもの〻如し、此時恰も獨軍の前方に在りたる驅逐隊は南西微風に乘じ夥しき灰色の煤煙を揚げ

（圖）

N

太陽

風

午后七時

ウイスバーデン

フリードリッヒ・デル・グロッセ ノ

第一戦隊

第二戦隊

第四偵察戦隊

第三戦隊

第三駆逐隊

第五駆逐隊

ロストック

第一偵察戦隊

7.15 p.m.

V73 1 } 魚雷發射
G88 2 }

第三駆逐隊ノ三艦

7.23 p.m.

第十一駆逐隊ノ

7.25 p.m. 頃第九駆逐隊ノ半隊 10 魚雷發射

7.39 p.m.

第五駆逐隊

第五戦艦戦隊

第一戦艦戦隊

第四戦艦戦隊

第二戦艦戦隊

巡洋戦艦艦隊

獨リ S.32 ノミハ英ノ大艦

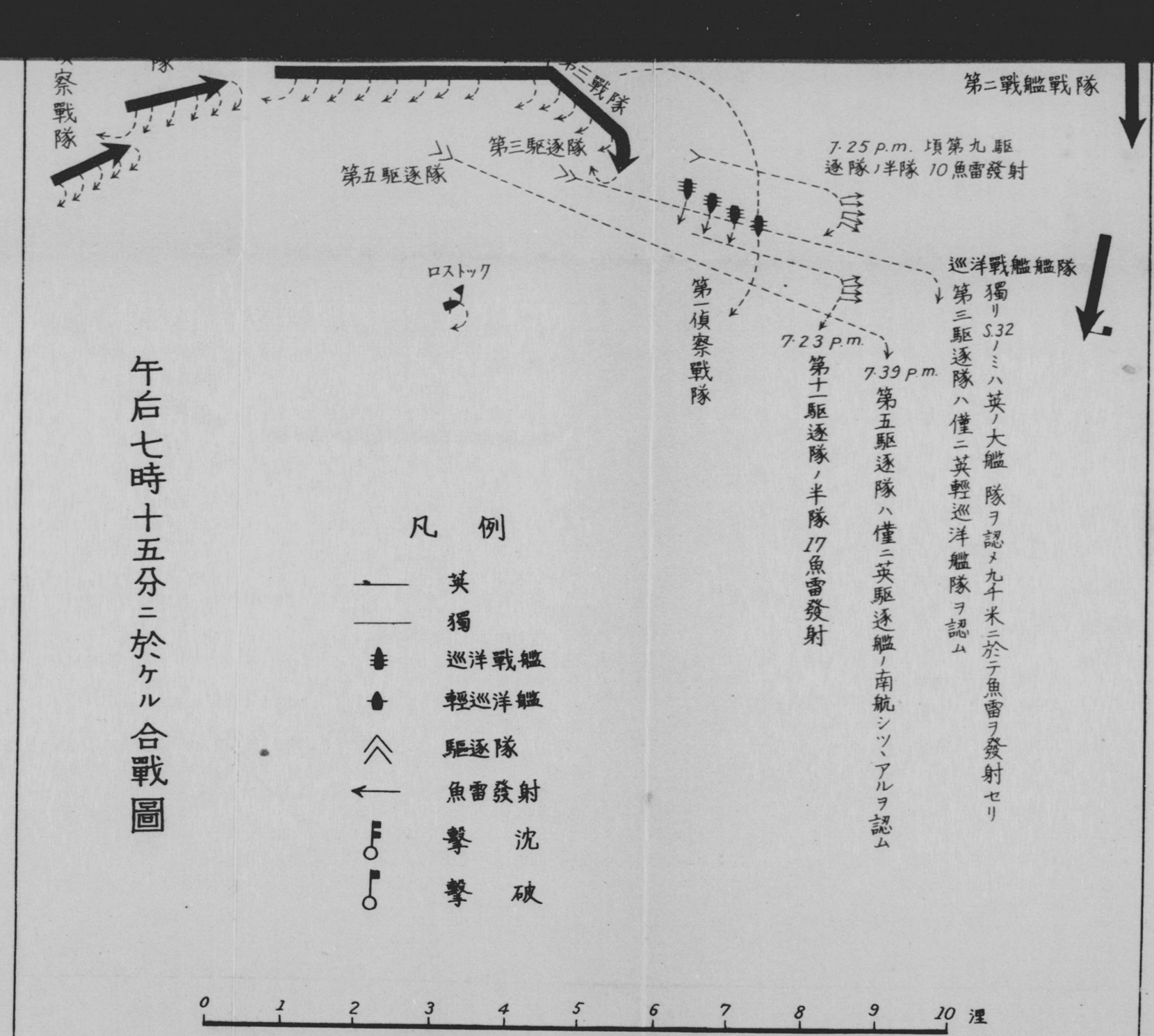
第三駆逐隊ハ僅ニ英艦

ヲ認メ得

戦列發砲ノ火舌

獨側ヨリハ僅ニ英

午后七時十五分ニ於ケル合戰圖



(第六圖)

主隊は此煙幕を利用して回避し、同七時四十五分其艦影を沒せり、是に於てビーティは第一及び第三輕巡洋艦戰隊に西航索敵を令し、之が後援として八時三十分西方に轉針航行中、幾もなく巡洋戰艦及戰艦各二隻を發見し、約九千百四十米突の近距離にて激戰を交へた。

此交戰中第二巡洋艦戰隊は第一巡洋艦戰隊の殘艦デューク・オブ・エヂンバラ（他二隻前に沈沒せり）を合せて戰艦艦隊の前方に占位し、同艦隊とビーティ隊との連鎖たりしが、遂に交戰の機會を得なかつた、第四輕巡洋艦戰隊は戰艦艦隊の前方に在つたが、午後七時二十分及八時十八分の二回第十一水雷戰隊を助けて獨驅逐艦を邀擊し、其四隻を擊沈した、次いで獨戰艦を襲擊し、八時四十

分カイゼル級の一艦に一大爆發の起れるを見たと。

兩軍主力の戰鬪は午後六時十七分英軍第一戰艦戰隊と獨軍第三戰隊との砲戰を以て始まり午後八時二十分に至るまで約二時間に亙れり、恰も展望不良であつた爲戰鬪は間歇的に彼我相見る毎に行はれ距離は概一萬九百七十米突乃至八千二百三十米突の間を上下した。

此間英軍は終始敵に近づかんとして南東微東乃至西に數回變針したが、獨軍は絕へず之を回避し驅逐艦の强襲と煙幕の利用に依り只管決戰を避けんと努めた、此の如くして兩者速力の優劣差あるが爲め數次の變針に依りて不規則なる同心圈上の對勢を描出し初め英軍は獨軍の前方有利の位置を占め在りし

も終戰期には却て獨軍の後方不利の位置に立つに至つた、併し英軍は獨軍と其根據地との中間に在れば其退路を遮斷し得べき戰略上有利の位置を占むることを得た。

午後十時四十一分英海軍省はジエリコーに次の如き緊急電報を發した、曰く獨軍主力は午後九時十四分歸港命令を下しヒツペル隊は後衞となり針路南々東四分の三東速力十九浬にて南下しつゝありと、此重要なる電報はビーテイ隊に於ては受信しなかつた、六月一日午前三時二十九分今は時既に遲く英軍はホーン・リーフより三十三浬あるのに獨軍は僅に十二浬と推定されたから之をホーン、リーフへの歸途を遮斷すること到底不可能と判斷した。

第十三章　夜戰

濛氣と暮靄の裡に敵を逸した英軍主隊は再び一浬の間隔を有する並縱陣列を制り、水雷戰隊を後尾に從へ、獨驅逐艦の襲擊に對する警戒を嚴にしつゝ、午後九時南微東に變針し、速力十七浬にて南下した、其目的は獨軍と其根據地間に在りて其退路を遮斷し、翌朝を期して之と交戰せんとするに在つた、其夜の警戒航行序列は次の如くである。

ビーテイは獨軍は北西方に遁れ、英軍は獨軍と其根據地との間に在りと推定したので、此際夜暗を冒して敵に近接するの冒險に出るよりも、寧ろ翌朝を期し、有利なる情況の下に獨軍を發見する方が有利なりと考へたので、ジエリコーの希望に從ひ、南微東に變針し、主隊と並航して南下した。

此くて英軍は南下を續くること約五時間で、翌六月一日の午前二時四十五分頃に至りて引返した、此南下中英軍主隊は一度も敵襲を受けなかつたが、主隊と行動を共にした輕巡洋艦及驅逐艦は屢〻獨軍を發見し、激烈なる夜戰を交へた。

其梗概を述ぶれば、英軍主隊の後尾にありたる第一輕巡洋艦戰隊は午後十時二十分巡洋艦一隻輕巡洋艦四隻より成る獨軍を認め、約十五分間激烈なる接戰を交へ、サウザムプトン及バーミングハムには多大の死傷者を生じた、又第四第十一及第十二水雷戰隊は屢〻獨軍を襲擊したが、其効果は不明で、英公報には

第四水雷戦隊の旗艦チッペラリーは大損害を受け沈没し、敵の一驅逐艦を撃沈したと述べて在る。

ビーティ中將麾下の第十三及第一水雷戦隊は戦艦艦隊の後尾に在つたが、六月一日午前零時三十分高速力にて其後方を通過せる一大艦の照射を受け其一艦を失ふた、午前二時三十五分他の一艦ドイツチランド級戦艦四隻を襲撃し、午前三時三十分チヤムピオンは獨驅逐艦四隻を發見攻撃した、第一水雷戦隊は單獨疾走中なるカイゼル級戦艦を襲撃した。

水雷敷設艦アブデールは完全に其任務を果したりと稱するも、其行動及敷雷の効果は詳でない。

獨軍は輕艦隊を以てする夜襲を企圖すると共に英軍の夜襲を豫期し、其一部を後方に從へて敵の邀撃に備へつゝ、ヘルゴランド島に向針した。

然るに急航して獨軍の前方に進出した英軍は、襲撃に最も有利なる反航針路を取りて獨軍に肉迫し、展望不良なる當夜の天候は敵の攻撃を一層容易ならしめた。

午後十時過エルビングはアレシユーサ級の輕巡洋艦と交戦し大損害を與へて之を走らし、午後十時三十分頃第四偵察戦隊の舊式輕巡洋艦は優勢なる英軍と衝突し、輕巡洋艦フローエンローブは雷撃を受けて沈没した、午後十一時より午前一時に亙り、第一戦隊は數回の襲撃を受けた、獨軍は探照砲撃を以て之を迎へ驅逐隊嚮導艦一隻(G60)を撃沈し、驅逐艦四隻

を擊沈し、七驅逐艦に大損害を與へた、英艦チツペラリー及ターブエレントが最後を遂げたのは實に此時である。

此戰鬪中午前零時十五分クレッシー型の英裝甲巡洋艦一隻獨主隊の傍一千米突に現はれたが、猛火に浴し大火災を起し、四分時の後爆沈した。

獨軍に在りては輕巡洋艦エルビングが他艦と衝突して大損害を受け、ロストクと共に乘員を救ひ、艦體は之を遺棄した。

英軍は獨軍の進路に機雷を敷設し、獨驅逐艦一隻は之が犧牲となつた。

損傷艦ルユッツオウは他艦と行動を共にして居た、而してポムメルンは拂曉頃雷擊を受けて沈沒した。

此夜獨驅逐艦は遂に英軍主力を襲擊する機會を得なかつた。

六月一日午前二時三十九分ジエリコーは英軍はホーン・リーフより三十三浬の距離に在るのに、獨軍は僅に十二浬しか離れて居らぬから到底之をホーン・リーフへの歸途を扼するのは不可能だと判斷した。

同午前三時二十九分海軍省よりの最後の情報は獨軍は、ホーン・リーフ燈臺から十七浬に在りて英軍を距ること二十三浬であると。

午前四時七分に至るまでビーティは獨軍の針路が南東なりしことを知らず、依然西方なりと考へて居た。

之より先き、ビーテオは輕巡洋艦バーミンガムが五月三十一

日午後十一時三十分に獨巡洋戰艦隊が西南西に駛走しつゝありしを發見したとの報を得たので彼が英ビーテイ隊は尙獨軍と其根據地との中間に在りとの彼の所見を强固ならしめた。

故に敵軍は前夜は英軍の後尾に橫過索敵しつゝあつた、拂曉ビーテイ隊は尙ホーン・リーフより十六浬に在つた。

第十四章　六月一日の行動

六月一日黎明英軍はヘルゴランド北方の獨軍の水雷敷設面に近づいたが、獨軍を發見しなかつたので、更に北上索敵し、併せて味方巡洋艦及驅逐艦を收容する爲、午前二時三十分頃北緯五十五度東經六度附近に達し、反轉して北上した、此日早朝には展望三、四浬を出でず、前日よりも更に不良であつた。

英軍は午前七時過ぎホーン・リーフ附近に達し、之より午前十一時迄、或は南し普く戰場附近及獨國諸港に至る航路を捜索せしも、遂に獨軍を發見しなかつたので、ジエリコーは獨軍は既に其根據地に歸還せるものと判斷した。

之れより先き午前四時英軍は一隻の獨航空船を認めたので、約五分間之を砲撃したが、煙霧の中に其船影を沒した。

ビーテイ隊はホーン・リーフの南西北緯五十五度附近まで南下した後引返したが其後の行動は明瞭でない。

前日の戰場捜索の結果沈沒艦アーデント（驅逐艦）、フオーチユン（驅逐艦）、及チツペラリー（驅逐艦）の生存者を救ひ、スパローホーク（驅逐艦）は衝突の結果航海に堪へざるを發見したので乘員を收容して之を沈めた、戰場には夥しき艦材破片の漂流して居るのを認めたが遂に敵艦を發見しなかつた。

午後一時十五分ジエリコーは獨軍の歸港は最早疑ふの餘地なきものと斷定し、全軍を率ゐて歸途に就き六月二日午前各其

根據地に歸投した、而して曩に損傷を蒙りて列外に出で歸途に就けるワースバイトは ロサイスを距る約三時間の沖合に於て獨潜水艦二隻の襲撃を受けたが無事歸港した、マルボローは損傷の爲艦隊速力の維持困難なので午前二時三十分司令官（バーネー中將）は將旗をリヴエンジに移し、同艦はハムバーに向ひ回航中ドガーバンク附近で獨潜水艦の襲撃を受けたが無事歸港した、又五月三十一日に運動不能となつたウォーリアーは飛行機母艦エンガーダイン之を曳航し六月二日午前七時十五分に及びたるも天候不良の爲曳航を斷念し、之を遺棄するの已むを得ざるに至つた、多分沈沒したのであらう。

獨軍の行動に就てシエーアに從へば六月一日午前三時獨軍

主隊はホーン・リーフ附近に達し後れたるリユッツオウを待合さんと決心した、之れより先き五月三十一日午後九時三十分以後十二浬の速力にて航行に堪ゆとの報告あり、後五月三十一日正子頃護衛の驅逐艦G第四十號よりリユッツオウは航海至難となり微速力にて南進しつゝありとの報告があつたのが最後で、六月一日午前三時三十分には同艦は午前二時放棄せられたとあつた。

兎に角英軍の主隊及輕快部隊が何れも北方より來襲しなかつたことは明白で、特に驅逐隊は拂曉近くまで觸接を保持して居たに拘はらず、今は一隻も其姿を認めざるより考ふれば英軍は退却せしものと判斷したと。

六月一日早朝の偵察任務に服する爲め航空船L第十一號第十三號第十七號第二十二號及第二十四號は夜間飛翔したが、午前三時十分になりL第十一號から戰艦十二隻小型艦多數及驅逐艦より成る英軍がテルセリングとホーン・リーフとの連絡線の中央附近を北上して居るとの報告があつた、次で間もなく右英軍の北方に當り別に戰艦及巡洋戰艦數隻より成る他の英軍を認めた旨報告があつた。

五月三十一日正子少し前頃四隻の航空船は、ヘルゴランド島の北西より西方に於て獨軍の翼側を掩護せよとの命に從ひ、航空船L第二十一號はノルドホルッを出發した、當時風向は南西で海面に近く濛氣があつたが次第に上空に擴張し來り展望不

良となつて終には「ヘルゴランド」島を視認すること不可能になつた、午前三時北方〇三三及B地點（獨軍の特設地點にして不明なり）に煤煙を發見したので之に向ひ變針し、同三時十分大戰艦十二隻輕快艦艇多數を伴ひ全速力にて北々東に航進中なる英軍の一隊を認め其後尾上空に續行して敵狀を報告して居たが、同三時四十分其北方に戰艦六隻及輕快部隊より成る他の英軍の一部隊が北航するを認めたが、英軍は間もなく各戰隊の列向變換を行ひ西方に向ひ他の英軍の第一部隊に合同せんとした。

午前三時五十分北東方に當り英巡洋戰艦三隻及小型艦四隻は獨航空船の南に向て航進し、獨航空船と英軍主隊との中間に入る如く行動しつゝあるを發見したが、展望不良で大概同時に

英軍の一部隊を認め得るに過ぎざりしに反し、一千百乃至一千九百米突の高度に在りし航空船は英軍では明瞭に認めたであらう。

其れが爲め猛烈に英軍の射撃を受けたが命中彈はなかつたが尙一層距離を增加した方が有利と認めた、英軍の砲撃は午前四時三十分迄續いたが、南西方近距離に在つた英巡洋戰艦の砲火を避くる爲め北東方に避けなければならぬ樣になり遂に敵を見失ふた。

其他航空船は縱橫に飛翔偵察を試みたが敵を發見するに至らなかつたが、午前六時シエーアより航空船に歸還を命じたので夫々歸途に就き正午頃ノルドボルフに著陸した、而して艦隊

も歸途に就き日沒頃皆河口に入港した、シエーアは此の第一部隊は海戰の報に接し英吉利海峽に在つた一隊が進擊し來るものと判斷して居つたが、第一偵察艦隊は重要なる戰鬪に參加する能はず、且第三戰隊の先頭艦も彈藥の殘額が缺乏して居り快速巡洋艦の內フランクフルト、ピラウ及レーゲンスブレグの三隻のみ使用に堪ゆる狀況であつたので、當時の天候で空中偵察のみに信賴するは危難と信じたので戰鬪を斷念しシエーアは全軍に歸港命令を發した。

第十五章　戰果

此の如くして海戰は局を結んだ、然るに獨國政府は自己の損害は喪失艦艇數に於て

巡洋戰艦　一隻（リュッツオー）
弩級前戰艦　一隻（ポンメルン）
輕巡洋艦　四隻（ウイスバーデン、エルビング、ロストツク、フロウエンロブ）
驅逐艦　五隻

以上排水量合計六〇、七二〇噸なるに英軍の喪失艦艇は

弩級戰艦　一隻（クヰン・エリザベス型）

巡洋戰艦　三隻（インデファチゲーブル、クヰン・メリー、インヴヰンシブル）
裝甲巡洋艦　四隻（デフエンス、ブラック・プリンス、ウアーリヨーア、クレツシー型一隻）
輕巡洋艦　二隻
驅逐艦　一三隻

の多數に上るが故に勝利は獨軍に在りと、之に對して英國政府は英軍の喪失せるものは

巡洋戰艦　三隻
裝甲巡洋艦　三隻
驅逐艦　八隻

なるも、獨軍の損害は多大にして其公表せし以外に左の如く

弩級戰艦　三隻（內二隻は沈沒に垂んとし一隻は歸港不可能の程度に大破せり）
巡洋戰艦　一隻（歸港不可能程度に大破せり）
輕巡洋艦　一隻（大型にして戰艦なりしやも知れず沈沒に瀕する狀態なりき）
驅逐艦　四隻（大破損歸港不可能ならん）
潛水艦　一隻

あるが故、且つ又獨軍は勝利を得たりと稱するも、海上の管制は依然我軍の手中に存するが故に勝利の榮冠は無論英軍の頭上に在り、皮肉なる英海相バルフォーアは獨國は勝利を主張するも、勝利は勿論英國側に在り、若し獨國にして此の如き勝利を再びするならば終に其海軍は全滅するに至るべしと。

此の如く砲雷の戦は變じて筆舌の爭となれり、而も英獨兩軍共若干の損傷を受けながら、互に其勝利を主張するは恰も腕白なる少年が互に喧嘩を爲して頭に瘤を顔面に擦傷を負ひながら、其勝利を主張する狀に髣髴たり、戰爭當時は國民の士氣に關するが故に自軍の損害を隱蔽する必要ありしも、戰後の今日に於ては其必要は消滅し自然に暴露するに至つた、今之に據り兩軍の有形的戰果を計上すれば實に左の如くである。

英軍の損害

艦種	艦名	損害程度	時刻(期)	狀況摘要
巡戰	インデファチガブル	爆沈	砲戰開始後約十五分	重砲彈命中火藥庫に大爆發を起したるものの如く爆煙の收まりたるときは艦體全部沈沒し去りて痕を止めず

沈沒（排水量合計二一、四〇〇噸）

艦種	艦名	損害程度	時刻(期)	狀況摘要
巡戰	クイン・メリー	爆沈	砲戰開始後約三十分	第二砲塔附近に重砲彈の齊撃を受け前部火藥庫に大爆發を起し艦體は吹上られて兩部に切斷し數秒にして沈沒し了れり
巡戰	インヴインシブル	爆破顚覆	兩軍主力衝突の初期	重砲の集中彈を蒙り數分時にして爆破顚覆し後數十分にして沈沒せるもの如し
甲巡	デフエンス	爆沈	兩軍主力衝突の直前	五〇〇碼以外の近距離にて重砲の集中彈を蒙りて先づ大火災を起し續て火藥庫の爆發に依り瞬時に沈沒せり
甲巡	ブラック・プリンス	沈沒	同右	デフエンスと同一情況の下に苦戰し水線以上の損害多大なりしのみならず火災に罹り約一時間餘にして沈沒せり
甲巡	ウオーリアー	同右	同右	ブラック・プリンスと同樣苦戰し機關を破られ運轉の自由を失ひたるも危地を脫し友艦に曳航され翌朝に及びしも波稍高く救助の見込なき爲遺棄後沈沒
驅	ネスター	同右	第一回戰に放てる敵艦雷强襲の時	敵水雷隊と衝突激戰の後巡洋艦に薄り魚雷を發射せしも敵彈命中の爲運動不能となり後沈沒
驅	ノマッド	同右	同右	午後六時頃敵輕巡洋艦數隻の攻撃を受け撃沈さる
驅	シャーク	同右	兩軍主力衝突前	

三三八隻隻隻					大		
驅	驅	驅	驅	驅	戰	巡戰	
チツペラリー	アーデント	フオーチユン	スパローホーク	タービユレント	ワースパイト	ライオン	
同右	沈沒	沈沒	沈沒	沈沒	落伍	一砲塔全滅	
夜襲戰					第一期第二期戰	?	
襲擊の際敵火の爲擊沈せらる		倍艦と衝突沈沒		附近を通過せる大艦の探照砲擊を受け運動不能となり後沈沒	大彈根約二十七、甲鈑を貫通せるもの二、舵機に損傷を受け一時運動の自由を失ふコンパートメントに浸水あり、戰死九、負傷八〇、戰列を脫し直に歸港	大口徑彈の命中六箇所其一彈はQ砲塔天蓋を貫きて炸裂し砲員全部を殺せり火藥庫を下部より閉鎖し無事なるを得たり	

損害							戰巡輕驅 洋巡輕驅 戰洋逐艦 艦艦艦 二三三五隻隻隻隻
巡戰	巡戰	戰	輕巡	輕巡	輕巡	驅	驅
プリンセス・ローヤル	タイガー	マルボロー	サウザンプトン	バーミンガム	チエスター	オンスロー	デフエンダー
一砲塔不能	一砲塔不能	落伍	大損害	大損害	大損害	落伍	落伍
?	?	兩軍主力衝突の初期	夜戰		兩軍主力衝突前	第二期戰の終期	
大口徑砲彈命中五ケ所、其一彈X砲塔のバーベッド甲鈑を穿貫し甲鈑の大破片内部に突入し旋廻裝塡を不可能ならしめたり	一大口徑砲彈砲塔に入りて炸裂し砲員を殺し裝藥を引火したる爲當該火藥庫に滿水、別水線に巨彈一發命中穿貫	敵驅逐艦連續襲擊の際右舷艦橋下に魚雷を受け外底に約三十呎大の破孔を生じ八度傾斜十七節にて戰鬪繼續翌未明戰列を脫し歸港	敵大艦隊と接戰し大小十數彈を蒙り乘員の約三分の一を失ふ	サウザンプトンと同一狀況の下に戰ひ晝間二彈夜間二十餘彈を蒙る	フッド少將の命を受け前方に進出偵察中三四隻の輕巡洋艦と會戰す死傷九十餘内戰死三十六	敵艦襲擊の際損害運轉不能	非戰側に隨伴中敵彈命中前缺破損速力十節に減じオンスローを曳航

					小損害 戰巡輕 艦一隻 洋戰艦一隻 巡洋艦一隻
驅	アカスタ	大損害?	兩軍主力衝突前	シャークと同時敵輕巡洋艦數隻の猛撃を受く	
驅	クリストファー	大損害?			
驅	オンスロー	大損害	夜襲戰	輕巡洋艦の猛撃を受け健全なるは中尉一、候補生一のみとなる	
驅	コロツサス	小損害	主力衝突の際	一、二彈上甲板に命中	
巡戰	ニュージーランド	小損害	?	一彈前部砲塔の上甲板の根に斜に命中上甲板大破砲塔一吋旋廻不能となりしも塔内故障なし	
輕巡	キャリオープ	小損害	主力衝突後敵驅攻撃の際	敵戰艦々隊の猛撃を受けしも損害大ならず死傷數名	

獨軍の損害

艦種	艦名	損害程度	時刻(期)	狀況摘要
巡戰	ルツツオウ	沈沒	午後十時頃	水線甲帶を破られ海水浸入

沈	戰	ポンメルン	沈沒	六月一日午前三時
	輕巡	ウイスバーデン	全艦火災に包まれ沈沒	午後六時頃 一機關兵の外全部死
	同	エルビング	沈沒	六月一日午前三時頃
	同	ロストツク	沈沒	六月一日午前三時四十五分
	同	フラウエンローブ	沈沒	午后十時頃
	驅	V四八	沈沒	午后六時四十八分
	同	V二七	沈沒	午后四時三十分
沒	同	V二九	沈沒	同右
	同	V四		

次に英獨人員の死傷を比較すれば左の如くである。

	英	獨
戰死		
士官以上	三四三	一七二
下士官兵	六一〇四	二四一四
負傷		

士官以上	五一	四一
下士官兵	五一三	四四九

前述のものを採て考ふるに何れを勝とし何れを敗とすべきや全然不明であるのみならず、兩軍共海戰の目的を達して居らぬ、古來海戰と名のある海戰はヂヤーヴイスのセント・ヴヰンセント沖でもネルソン提督のナイルでも、トラフアルガー等は勿論我國民の記憶に在る伊東中將の黃海の役(日清戰爭)でも東鄕大將の黃海々戰、日本海々戰、上村提督の蔚山沖海戰等に至るまで海戰とは必ず一方は大捷利で他方は慘敗である、然るに現代の海軍國中一二を爭ふ英獨兩國のジユトランド海戰が勝敗不明、有耶無耶に終つたのは何故か、是れ吾人が言はんと欲する處

で又諸君の聽かんと欲する處なるべし、曰く艦艇兵器の精粗なるが爲めか、否機力の關係に非ざるなり、諸種の戰技に優劣なきが爲めか、否機術の關係に非ざるなり、否全く兩者の心術如何に依るなり、之を具體的に云へば勝敗の差の無かつたのは物質的の問題でなく、さればとて技術的の問題でもなく、全く精神的の問題換言すれば兩軍特に物質的に優勢なりし英軍に於て攻擊精神が旺盛でなかつた爲めだと斷定して差支ないと思ふ。

往昔英國が佛蘭西の諸國と海上に覇を爭ひし時代に於ては佛國海軍の打算的なるに反し、英國海軍の敢行的なりしは顯著なる事實で、此敢爲不退轉の金剛心が其海軍軍人を支配したるが故に遂に今日の盛大を致したる所以である。

第十六章　海戰餘錄

ジユトランド海戰に就ては前章までにて盡したりと信ず、而して前數章に記述せる事項を調査し研究しつゝある際、圖らずも此海戰に關し將來の參考となるべき事項を隨所に發見し、之を採錄したのもあるが又せざるのもあり、さりとて全然之を捨て去るに忍びないから、本章に一括して之を收錄した。

一、消耗兵器

獨軍の消耗兵器はフオン・シエーアに從へば次の如くである。

重砲彈	三、五六五發
中口徑砲彈	三、九二一發
輕砲彈	二、九六二發
魚雷	一〇七本

英軍のものを公文書に就て調査せるに沈沒した軍艦は致し方ないとしても、終始奮闘しつゝあつた軍艦で報告のないものがある。

今有りの儘を計上すれば左の如くである。

第一戰艦戰隊

重砲彈	八二九發
中口徑砲彈	三五七發
魚雷	三發

第二戰艦戰隊（エリンよりの報告を欠く）

內キングジヨージ五世は	二二九發
エジヤックスは	九發

第四戰艦戰隊（ローヤル・オークよりの報告を欠く）

	六發

以上はジエリコー隊のみであるがビーテイ隊の方は次の如くである。

巡洋戰艦艦隊（沈沒三艦及タイガーの報告を欠く）	一、二二八發
内ライオン	三二一發
ニュージイランド	四一六發
プリンセス・ローヤル	二三〇發
第五戰艦戰隊、ウアースパイト及レイヤの報告を欠く）	五六三發

二、魚雷の命中數

魚雷の發射數に就ては不充分なれども前述以外には知るを得ない、獨軍は一〇七發を發射したと云ふが雷擊を受けたのは第一戰艦戰隊の旗艦マルボロー一隻しかない、三十一日の午後七時二十分の襲擊には二十二發を發射したと稱せら

るゝが一隻も命中を受けて居らぬ。

飜て英の發射數を計上すれば公文書には七十五發とあるが其中三十五發は晝間戰鬪の場合で僅に二發命中で殘餘の四十發は夜間に屬する、而して雷擊を受けて沈沒したのは夜間に舊式戰艦ポンメルン及舊式巡洋艦フラウエンロブの二隻だけだ、英獨兩軍の發射魚雷數は合計百八十二隻であつたが命中したのは三隻のみだ、之は兩軍共回避が巧妙の爲めよりも餘り遠距離から發射した故だ、前述の戰記を熟讀すれば直に首肯せらるゝ如く兩軍共近くて一千米突遠いのになると七千米突位から發射して居る、水雷戰術は要するに肉薄戰術だ魚雷を發射したことを知つてから如何に巧妙に轉舵回

避しても到底免るることが出來ない位まで接近して雷撃せなければならぬ、是に因て之を觀れば此海戰は流石富强の二國の戰だけありて魚雷の濫費戰であつた。

魚雷

海軍將校並海軍技術家は熟れも戰訓に多大の興味を有するは宜しいが、克く注意して其眞理に適合するや否やを識別するのが緊要だ、砲塔の改良火藥庫防護の必要事項に關しては異論の餘地ないが、大艦攻撃に於ける魚雷の價値の如き原則に亙る事項に就ては這次海戰其自體の事變を外にしても又之より起る事變に關しても幾多の疑問の發生を免ることは出來ない、乃

ち魚雷は果して該事變の原因なりしや否やと云ふことである、吾人は日々聞くに將來に於ける魚雷は航空機より或は潛水艦より發射せらるゝかを問ふを要せず、凡て超弩級戰艦を破毀せずんば已まざるものある可しとの言を以てす、然れども吾人は第十九世紀初頭に於ても之に類したる說の行はれしを見且日露戰爭に於ても此種の論を耳にしたるも其今日に齎らしたるものは奈何、努級艦の出現となり魚雷は依然として昔日と何等其容積の變化を示さない、吾人は須く偏見を去り虛心坦懷本公文書中の統計表に全然信賴し魚雷の果して如何なる效果を齎らしたる乎を考慮す可きである、獨逸側に於ては雷撃數實に一〇七發を算したりとはフォン・シエーアの是認する所である、然

るに何事ぞ此中一發の撞撃を蒙れるもの僅かに戰艦マルボロー一隻に過ぎない、而も同艦は要部を外れたる爲め依然として翌早朝に至る迄戰列に在りて其位置を保持した、午後六時及午後六時三十分降りて午後七時二十分の獨驅逐隊襲撃は一として英艦に損傷を蒙らしめたるものがない、午後七時二十分の襲撃には、二十二發の魚雷發射を行ふた、又英の雷撃數約七十五發に達すとは公文書の示す所で其中三十五發は晝間發射に係り二發の命中を來し、夜間の四十發中少くとも四乃至五發の命中を得た、本來魚雷攻撃の決行は晝間を以て理想的と爲す、當時彼我參戰の艦艇二六〇隻の多數に上り彼我の雷撃數一八二發に達した、此中八發の命中卽ち四パーセント四を算したるものと

信ぜられたが實際魚雷に觸れて沈沒したるものは僅に舊式戰艦ボンメルン舊式巡洋艦フラウエンロプ及新式巡洋艦ロストックに過ぎないで此等は熟れも夜間二十一吋型の魚雷に襲撃せられたるものである、若しリユツオー及エルビングの兩艦も沈沒せりとせば其は雷撃に基因せるものと斷ずるは不可能で、リユツオー臨終に際し味方たる獨逸側の魚雷一發を蒙り死期を早めたるは事實なるも實は英砲火によりて撃沈せられたるものである、若し夫れエルビングの損傷に至りては其僚艦ポーゼンと衝突の結果のみ、フオン・シエーアの報告によればロストック、エルビングの兩艦は遺棄せられて洋上に浮びしも遂に英艦隊の見ゆるや蒼惶獨逸側自ら之を爆發せしめたるもので唯

的確に魚雷而已に基因する沈沒艦は獨りポンメルンとフラウエンロブに過ぎない、此等の事實を釋明せんと欲するものは宜しく英公文書に就て之を見よ、噫戰鬪に從事する事十二時間、之に參加せる艦艇二六〇隻、魚雷發射數一八二發而して雷擊の犧牲と化したるもの驚く勿れ僅々二隻而も參加艦艇中最舊式に屬するものならんとは。

砲及裝甲鈑

砲術上の教訓は幾分隱蔽せられて之が眞諦を捉ふること不可能で就中砲火指揮に關するものに於て然りだ、然れども若干重要事實の暴露を來せるは一點の疑念を挾む餘地がない、其最

顯著なる教訓は攻撃及防禦に對し夫々割當られたる主力艦排水量比率を規定す可き標準に關するものだ、ジエリコー元帥は忌憚無く陳述するに英巡洋戰艦の沈沒は其貧弱なる裝甲防禦就中砲塔裝甲及甲板防禦の貧弱に基因すと云ふて居る、假令砲力に於て優るとも不適切なる防禦性を有する艦船は到底適切なる防禦性を有する艦船に匹敵するに足らざるはジユトランド海戰之を明示して餘蘊がない、而も此點に於て詭論の生ずる無きを保し難きものあれば注意を要する、乃ち若し英にして獨の發砲後直に或は之より先きに齊射に全力を傾け獨に命中彈を蒙らしめたりとせば、クキン・メリー及インデフアチガーブルの兩艦は沈沒を免れしならんとの說を爲し或は十三吋半の重

彈三四發を同時に發射せば獨巡洋戰艦の攪亂期して待つ可かりしなりとの說を爲し英砲力の劣弱を批難するものなきを保せず、然れどもデルフリンゲル砲術長フォン・ハーゼは英の發したる重彈一發は見事に其司令塔に命中せるを記錄すれども其及ぼせる被害を記す所が無い、英砲力問題に關する贊否の論は殆んど其底止する所を知らない、今後暫く繼續して議論の基礎となるならん、ジエリコー元師述べて曰く、最善の防禦は强烈なる攻勢を採るに在りとは戰略上の眞理となすも之を物質上に應用せば詭論たるを免れないと、若し、サー・ウイリアム・ホワイト時代の防禦甲板を有する巡洋艦にして今日の戰鬪に從事せば其結果如何、何人も之を知らんと欲する所であらう、彼我同齡の

艦船の裝甲及防禦に當てたる排水量比率を見るに其差異著しきものがある、此事實はクキン・メリーの二十三バーセントに對しサイドリッツの三十バーセント九、オラオンの三十二バーセントとなるに比しカイゼルの三十五バーセントなるに徵して明かである、現にフッドの如きは僅に三十三バーセント五に過ぎざる有樣である、此等の比率と雖も全部艦船に就て示せるものに非ずして只其一部に過ぎない、インデフアチガーブルは初め三發の命中彈を受け其砲彈は孰れも後砲塔に近き上部甲板に貫通し後砲塔架を繞る裝甲に突當りて爆裂したのである、而して其裝甲の厚さは僅に八吋に過ぎず、貫通の眞否確かならずと雖も、一報告に依れば命中による爆裂は小にして火藥庫の破

裂はクキン・メリーの艦内に發生したるものに同一の原因ではないらしい、ニウージーラシド座乘ベケナム少將の報告書中次の一項がある、チヤット・フイールド艦長の陳述に曰く、同艦は明かに火藥庫爆裂によりて爆沈せるものなりと、生存者何名ありや報告に接せざるも一般の證人は火藥庫の爆發を確信すと第二回の齊射A砲塔附近に爆裂を來し全艦の破毀を見るに至つた、敍上の兩艦は孰れも裝甲に缺くるもの少くない、十一吋彈齊射に對し輕裝甲は何等の用を無さず、而も重裝甲と雖も一時一發を防ぐを得可きも二三回の齊射に對しては殆んど抵抗力が無いらしい、英の齊射は獨に比し遙に散布界大なりしを以て之に伴ふ效果を得る所がなかつた。

英巡洋戰艦の裝甲に對する批難に關して極めて明瞭に了解を要する一事がある、何ぞや曰く、批難者流は何等甲鈑の抵抗性に想到せざる事である、甲鈑の點に於て英艦は單に列國の艦に比し優良なるのみならず寧ろ超絶するものある事を信ずる理由あるのみに止らず尙一步進めて之を實證するに足る證憑の存在するものがある、然れども世上甲鈑と甲鈑の位置との差別を爲さざるものがあり、或は甲鈑の厚さを考察せず、或は甲鈑の抵抗性を齎す爲適切なる裏鈑の必要を了解せざるものあり、今一巡洋戰艦に就て見るに帶（ベルトプレート）鈑中の一個は穿孔を見ざるのみならず凹痕をも留めずして全部一面に舷內に陷入したるものがあり、ライオンに於ては一彈の銳角をなして降下しX砲塔の後

部甲板を貫通せる爲非敵側に於る裝甲帶は甲鈑の比較的軟弱なる裏面に於て打撃を蒙り鈑其自體は舷外に突出せられて居る、現代裝甲は此種攻撃に耐ゆる施設を有せない此の場合に於ては甲鈑は穿孔を生ぜず其裏面に相當凹入して其對側に於ける硬面に甚だしき龜裂を示して居る、若しライオンにしてクヰン・メリーの如くQ砲塔に損害を被りをらんには瞬時に爆沈を免れざりしならん、午後四時一重彈はライオンに命中し其砲塔の天蓋を吹飛ばし砲室を全然破碎して火災を起さしめた、此後間もなくインデフアチガーブルは撃沈せられ午後四時二十四分クヰン・メリーは爆裂して其影を沒した、降りて午後四時三十五分頃豫てよりライオン砲塔内に餘焔を保ちたる火の手は揚

彈藥筒に在りし裝藥に點火し火藥庫員及彈庫員の全部を燒死せしめた、然れども火藥庫の扉は既に密閉せられたから慘憺たる爆發を免れ必然的轟沈より救はるゝを得たのだ、然るにクヰン・メリーに至りては稍其趣を異にするものあり、同艦の一重彈命中を受けたるは午後四時二十分で右側砲—Q砲塔—は其用を爲さざるに至り、獨り左側砲のみ砲撃を繼續した、然るに午後四時二十四分該砲塔は一重彈の貫通を受け、砲室下の作業室内に炸裂を來して猛火を發したらしい、乘員の將に身を以て逃れんとせるとき火藥庫は轟然爆裂した、蓋し之れ炸裂せる砲彈の作業室に於ける裝藥に點火し此處より火焔は揚彈藥筒に侵入し其途中恐らく爾餘の裝藥に點火し、加之該筒下の火藥庫扉の

開放ありたる爲火焰は蔓延して益々裝藥に移りたるものなる事炳乎として蔽ふ可からざるものがある、然れども敍上三巡洋戰艦の出火は孰れも砲室より發し作業室を經て揚彈藥筒並火藥庫に浸入せるものでは無いらしい、蓋し筒及揚彈藥機は如何なる場合に於ても作業室にて終るが故である、英海軍の裝藥は凡そ四分の一裝藥四部より成り同時に二部を引揚るものである、作業室に於て之を籠（ケーデ）に移し、籠は之を砲の後部に運搬し、適當なる防燒鈑を以て一朝失火の際砲室より作業室に火焰の途を開かしめざる施設がある、然るに此等の特種施設は揚彈藥筒若くは火藥庫扉に之を有せず、されば實際は火焰は作業室より火藥庫に自由に蔓延するを得たのである、此等の藥包にして一度

火焰を引かんか其內包强大だから限局せられたる室內に於て之が消火は到底絶望なるは論外である、クキン・メリーの前方二鍵を距りたるタイガー艦長はクキン・メリー艦長ベリー大佐の曰ふ所によれば同艦たと、然らば同艦甲板は驀進し來れる敵彈によりて粉碎せられ其彈片は作業室を繞る裝甲を貫通したるも舷の上部—非防禦部—を貫通し來らざりし事は明白である。

命中彈及不命中彈

インヴインシブルの轟沈は前述のものと異なるものがある、其砲術長は明記するに一彈はQ砲塔を擊ち內部に炸裂して天

蓋を吹飛ばし殆ど瞬間に艦の中央に一大爆發を生じQ火藥庫の爆裂せるを指示し而して艦は兩斷せられ、十秒乃至十五秒にして沈沒したと云ふ、此場合に於ては砲室內に於ける爆發の火藥庫に及びたる事一點の疑を挾む餘地が無い此等の四艦喪失により學ぶ可き主要敎訓は外部の砲塔防禦力を增進し作業室、及揚彈機に於ける對火焰施設の改善及彈藥供給の速度を鈍らしむる事無く換裝室と火藥庫との隔離を行ひ、加之浸入火焰に對し火藥庫の水平防禦の度を增加する事である、此等の敎訓は實に重大なるものだ、ライオンの受けたるは致命彈は僅に一發でインヴインシブルも亦同樣である、而して爾餘の二艦のみ齊射を受けたるに過ぎない、爾餘の大艦は何れも敵彈命中を免れ

たらしい、英死傷數は相應に之ありしも、其蒙りたる命中彈數は之を獨に與へたる命中彈數に比し僅少である、ルユッオーの如きは被害甚大で他の獨四巡洋戰艦も各二ダーズン內外の重彈を受けたるに對し、ライオンは十二回の重彈命中を蒙り其Q砲塔の破壞を見るに至り、プリンセス・ローヤルは九回の命中彈を蒙りX砲塔は其用を爲さざるに至りB砲塔は命中彈を受けしも內部の損害無く、タイガーは午後三時五十五分Q及X砲塔に夫々重彈の命中を蒙りしも何等の損害を受けなかつた、而してニユージーランドは一回インフレキシブル及インドミテーブルは何等命中彈を蒙らない、されば英の受けたる命中彈は凡て二十四發を算する、而して英大艦隊中戰艦にして一大命中重彈

を蒙りしものは只コロサスのみ、バーラムは四發の猛烈なる命中彈を蒙りヴアーリアントは全然無難、マレーヤは八發を受けたるも其一はX砲塔に命中せしも甚だしき損傷を蒙らず、他の一發は六吋砲臺に大損傷を與へたウォースパイトよりは何等の報告に接しない、由是觀之英巡洋戰艦及戰艦の受けた被害大なる命中彈は凡て五十發を超へない(沈沒三巡洋戰艦を含む)乃ち全命中彈の約一パーセント半に過ぎない、英艦隊側にありては多數の齊射を受けしも沈沒せるは三巡洋戰艦のみだ、以上は概算でデフエンス、ウォリオー及ブラック・プリンスの命中彈—三艦共沈沒—を包含しない、然れ共其及ぼす範圍内に於て英艦隊側の射擊は優越で到底獨逸側の之に匹敵する所でない、蓋し獨逸側

の巡洋戰艦のみにても英の發したる全部の重彈の中少くも三パーセントの命中を蒙りしに相違ない、況んや—戰艦の蒙りたる損傷あるに於てをや—本論(一)を參照すべし。

若し讀者にして充分に本公文書より英砲力に關する情報を摘發するの勞を厭はずんば、幾多の問題に關する興味多き材料を發見することが出來る、然れ共惜哉本公文書の索引法其宜きを得ずと云ふよりも寧ろ内容文書目次の適切と認められるゝものを外にして全然索引を有せざるを以て、本公文書の他日一般に普及し如此特有の公文書彙集を咀嚼吟味したるとき結局發せらるる可き疑問に對する答案を本公文書より摘採するには相當耐忍を包含するものと認むる、本公文書を現在の形式に於て

研究すればする程益々公文戰記刊行の結局必要の明かなるものを見ずんば非ずである。

設計及材料

今ジユトランド海戰に參加せる英艦隊に就て一考せんに其一般裝置圖は常に海軍省之を作成したるも其艦體艤裝兵裝及機械の細目計畫は全然英國の大請負造船會社之が作成の任に當つて居た、ポーツマス及デヴオンポート海軍工廠は約十二隻の主力艦艦體をペムブローク及チヤタム海軍工廠は輕巡洋艦約八隻の艦體を供給しウーリツチ海軍工廠は輕砲及砲架の一小部分を供給した、此等を除き英大艦隊の全部は殆ど各地の私

立造船所の契約により建造せられたものである、凡ての裝甲鈑凡ての重砲架及凡ての推進機關は悉く私立會社の設計及建造に依れるものである、艦砲其自體の大部分、就中重砲は、アームストロング會社ヴイカース會社の建造になれるものである、此等造艦材料の全部は凡て嚴密にして微細に亙れる海軍省製造方法書に基き製造供給せられ海軍省製造方法書は納品採否の規準を定むるが如き單純なるものでなく種々其他の重要點を規定して居る、乃ち私立造船所は皆海軍省製造方法書を標準に使用材料及技術の點より考察して製品の素質を檢査してある、又海軍省の强要せる化學上又は物理學上の試驗は其細目の範圍若は共程度に於て到底私立造船業者又は政府認可協會の

試驗と雖も之に匹敵する能はざる程だ、尙又製品納付前に於ける成績檢査に於ても私立會社は到底海軍省の自然的峻嚴なる要件の上に出づるものがない、海軍技術部より造船業者に對する不斷の進歩的要求、就中機關及兵器管掌部局の要求は材料技術の實質を改良し如何なる場合に於ても根本特徵として信賴性を有し且傳動の迅速、若くは經濟能率及操縱の妙を增進せしむることに集注せられて居た、ブラセー海軍年鑑の中に英海軍機關局長機關中將サー・デョーヂ・グッドウインは口を極めて私立造船會社が海軍技術上に有力なる裨益を及ぼせる實驗作業及種々なる改良事項に於て英海軍に致せる補佐の勞を稱揚する所があつた、然れども私立造船會社の補佐は少くとも互惠的

のもので世界中の船舶所有者は孰れも英海軍の實驗及改良事項により益する所が尠くない、一例を擧ぐればタービンと共に減速裝置は外部より海軍に採用したるものなるも輓近長足の進歩を來せるは信賴す可き重油燃燒裝置と共に主として刻苦其勞に當れる海軍省內の實驗による結果である。

然れども材料及技術上の進歩は躊躇なく進行し得るも設計變更の施行は根本的に其性質を異にせる事項である、前者は既往の經驗に基きて誤り無きを得るも後者には然らず、其嶄新なる考案の屢々現はるゝは只意見の進化の結果として行はるゝに過ぎない、而も之れ多くの場合に於て例令確實なる根柢を有するものありとするも殆んど贊否兩論相半するを常とする、就

中如此困難は方位盤射撃器具の採擇の如き極めて重要なる事項の決定に方りて其甚だしきを見た、該器具は大戰勃發の數年前に幾度か細心の注意を拂ひて試驗を行ひたる後漸やく一九一四年に至りて初めて之が裝置實施を見るに至つて居る。

ジユトランド海戰に鑑みて結論に到達せんと企圖するに方り注意を要するは一方材料と他方設計で其有利なるは普く認められるゝも費用又は時日、承認期若しくは其他の理由に基き最近海軍造艦計畫中に出現するの不可能なりしものあれば其邊の區別を明にする事必要である。

戰役の教訓

却說英軍艦の設計に關しては、ジユトランドに於る十二時間に亙る戰鬪のみを以てしては假令之を重要なるものとするも一部限局せられたる戰訓に止まるものである、蓋し吾人の學ぶ可き主要情報並資料は全戰役を通じて得たもので單にジユトランド海戰のみより獲たるものでは無いからである、一例を擧ぐれば軍艦驅逐艦乘組將校の皆均しく熟知する大戰の第一教訓は何ぞやと曰へば恐らくは艦內居住の價値と必要とであらう、此居住性は戰鬪により之を認められたるものではなく天候の良否に關せず終始北海の哨戒に從事するに及んで忽ち根本的重要性として之を實際に顯したものである、論じて此點に來れば戰訓とは如何之を正解するは往々難しとする所多く場

合に於ては單に之れ既往の經驗を確證せるものに過ぎずとなすを得べし、一例を擧げんか此特別問題に就ては居住の價値は抑日本海軍の初めて得たる教訓の一であつた、日露戰爭の初期に方り日本海軍は艦内士官寢室其他の室内可燃性用具を一切艦内より取除いたが其後漸次舊態に復せしむるの必要を感じた事恰かも一九一四年英國艦船が其艦内器具其他室内裝置を除去したるも其後幾何も無く之が全部復舊の餘儀無きに至れると同一である、居住室に於ける暖房增加施設も其後久しからずして喫緊の要を認められ殊に驅逐艦に於て痛切に感得した尙又戰訓の一は往々にして艦の設計中に於て一方其プロバビリチー及ポシビリチーと他方正當なる重量と裝置錯綜との重

大なる調和を行ふに方り故意に冒險的に決定したより偶然に起れるものかも測り難い、此例はマルボローが艦首に雷撃を受け戰闘後艦首より甚だしき傾斜を示したるに徵して之を知ることが出來る、同艦には全吃水を不當に增加する事無くして艦の左右又は前後の傾斜を正すに適切なる施設がないのである、之が適切なる施設は場合によりマルボローには有用であつたかも知れないが必須のものではない、此施設を裝置せば凡て爾餘の主力艦は孰れも不必要の重量と錯綜を以て不利を蒙つたであらう、如此事項に對しては艦の小區劃を增加する事は勢ひ傾斜修正の施設を增加することになる、吾人の獲たる教訓は如此ものよりも寧ろ主として他の方面乃ち艦船の實力若くは其

耐抗性にある。

防禦裝置

大戰中得たる艦船設計上の主要敎訓は本論に於て旣述した如く砲及魚雷に對抗する適切なる防禦の必要である、僅に二三分にして沈沒せる二萬七千噸の輕裝甲巡洋戰艦と多數の命中砲彈に堪へたる重裝甲獨艦とを對照せば其差異頗る顯著なるものがある、ジエリコー元帥は英國製徹甲彈の素質を考察して曰へらく概して英國製彈は獨艦裝甲の外部に於て炸裂せるが如しと、海戰後英砲彈は構造、彈頭强度及信管の設計に關し著しき變更を來せるは事實だが一方に於てはジエリコー元帥の記

事は吾人の信ずる所で英艦船の敵彈より蒙りたる損傷の實狀撮影寫眞の多數を接受せる以前に成れるものであらう(一九二〇年二月二十日「ゼ・エンヂニーア」を參照すべし)、獨艦船に於ける砲塔と裝甲帶の砲彈貫通狀態を見るに當時存在せる彈丸を以て貫徹可能に關し一點の疑念を挾む餘地が無い、ドガー・バンク及ジユトランドの兩海戰に於て獨巡洋戰艦の砲塔燒失したるも英艦船に發生せる如き同程度の爆發は無かつた、此理由の一は恐らく獨艦砲の裝藥は重き眞鍮の藥莢中に挿入せらるゝが故だ——之クルップ式尾栓の設計によりて課せられたる必要事件である——然れども他の理由は全く單なる僥倖に基くものであらう、海軍造船家にして未だ曾て集中齊射を防ぐに足る

艦船の考案を爲せるものはない、若夫れ單彈の防遏は夫れ或は之を爲し得可く否既に之を成し得た裝甲の全目的は彈丸破壞力を減殺するにある――之によりて彈丸を防止し得ざるやも知る可からざれども砲彈設計者を强要して致命力のより少き彈丸を用ゐしむるに至るであらう、乃ち普通彈の代りに僅少なる炸裂裝藥を有する徹甲彈を使用するように至るであらう、獨の十一吋彈一發はインヴインシブルの七吋砲室を貫通して其破滅を來せるが如し然るにクキン・メリー及インデファチガーブルの場合に在りては二發若くは其以上の砲彈同時に命中した、蓋し之れ英艦設計の細目並原則の點に於て誤謬ありしによる事を認めた、不適切なる防火陷裝置及火藥庫開閉裝置は砲架の上部に於て砲焰を止むる能はざりしも要するに此等は巡洋戰艦の輕裝甲に因由する些事である、若重裝甲とせば前記の弱點は暴露する事なかつたであらう。

船渠と設計

英艦の輕裝甲は幅濶き艦船を容るゝに足る船渠設備の缺如に基因する從て重量の關係上スタビリチーの理由により重裝甲を上部に及ぼすことが不可能であつたとはジエリコー元帥の斷言せる所である、然れども此說はクキン・メリーより狹き事十呎のインヴインシブル及インデファチガーブルに適用すること能はざるは勿論である、只此比較論は同時代の英艦船と米

日伊或は獨等の外國艦船に對照しての事である、過去四十年に亙りて船渠の寸法決定者は其先見の明を缺きたる爲め斯の如き記念を遺さざるを得ざるに至つたけれども之に因りて如此長期に亙りて英造艦計畫上の阻害を來さしめたりとせば之れ明に苦き事實と謂ふ可きである、艦幅の實際の差違は四呎乃至七呎で單にスタビリチーの點より觀れば從來よりも重裝甲部を引上げ、加之尙又水中に於て更に多くの對魚雷區劃を設置することが出來る、現在船渠入口の狹少なる爲或は盤木上水深の不足なる爲支障を感ずるもの尠からず——換言せばマーセイ河のバーケンヘッド側の船渠は恐らく最惡の例證であらう——然も追年海軍省に於て新設計案の審議に附せられ就中弩級

艦製造以來船渠の幅の擴張は早晩避く可からざるものがあつた時に方り何等一定の確乎たる措置を施さなかつたのは甚だ驚く可き事である、況んやジエリコー卿の曰へる如く本事項の絕へず海軍省に於て論議せられつゝあつたと云ふに於てをや。

大艦は雷撃に對し特に鋭敏なりとは大戰前既に世人周知の事にして其水中防護法は一九一四年海軍造船協會の席上討議せられたが何等特別の解決を見なかつた、艦幅にして一度擴張せられんか、其後製造にかゝる最近戰艦の入渠は或一定の地に限局せらるゝとするも、水中防護は比較的解決容易なるものがあつたであらう、勿論水中防禦法の解決を見たればとて直ちに機雷の防止に何等影響する所無きも、之を既往蒙りたる著き立

遲れに比すれば慥に魚雷の被害を割引することが出來た、近來大艦問題に關し荒唐無稽の說が英國第一流の新聞紙上に頻々として現はるゝものあるは笑止千萬であるが、其新聞紙上の大艦論に對する障害の一は將來魚雷の容積擴大を見るに至るものある可しと云ふにある、彼等は魚雷の頭部に一噸T、N、Tの炸藥を塡充す可しと迫るは事理を辨ぜざる甚だしきものではないか、現在の二十一吋魚雷はT、N、Tの約十分の一噸を有し其重量一噸に達して居り其發射管と裝架は更に一噸半の重量を加ふ、此外魚雷發射裝置の完成には魚雷搭載起重機、空氣壓搾機を初とし數種の器具を要するから、今裝藥の重量を二倍となし速力は依然として舊の如くするも魚雷と其附屬器具の重量は二

倍以上に達するであらう、—故に魚雷搭載は小艦船に取りては ずなりの重量增加を來すであらう、十五吋普通榴彈の炸裂藥は 二十一吋魚雷の其と其重量は殆ど均等である、今之を倍加せば 現存の十八吋砲の炸藥と同量のものになる、假令如何に裝藥の 量を增加しても尙一の解決を要する難問題は魚雷を如何に利 用するかと云ふ事である——乃ち敵の針路、速力を精査して雷 擊の奏效を期する問題は依然として殘存するのである、艦幅は 魚雷に對抗する適切なる防護の施設に要する一重大要素たら んも魚雷搭載航空機が既往の水上艦に優りて主力艦要擊に奏 效するものあらんとの提說は種々なる實際方面を無視するも のである此實際方面中最重要視す可きものは航空機の目星を附く

る犧牲艦の復讐である、航空機の攻撃は如何に考ふるも其支障大なるものがある、水上艦に對して航空機の飛翔は軍艦に標的を供する事恰も進行を示す汽車の攻撃標的を供するに彷彿たるものがある、魚雷の容積增大は必ず飛行機の容積を不釣合に增大するの已む可からざるものあるに至るであらう。

艦型

大艦問題の是非論は最近外國新聞紙上を賑はし之に伴ひて潜水艦航空機魚雷等の怪物は凡ゆる論衣を被りて現はると雖も一として吾人を信服せしむるに足るものがない、從てジユトランド海戰公文書の引照に何等の影響を及ぼすものがない、唯

之あるはフォン・シエーア大將が其海戰報告書中に於て艦型の比較的價値に關する其意見を陳述し居れる事である、フォン・シエーアの陳述は彼の全然判斷を通り拔け或場合には禮節を破りてジエリコー卿を貶さんと欲ずる批難者流を狼狽せしむるものがあらう、シエーア大將曰く

海戰は實證するに獨艦隊編成に於て且獨逸各種艦型の改良に於ても吾人は正確なる戰略並戰術上の意見によりて指導せられ且又是を以て吾人は今後益々同一の經路を繼續せなければならぬと、

凡ゆる武器は悉く其分を盡して此結果を齎せりと雖も其決定的分子は直接間接共に大艦の長射程重砲にある、敵の蒙りた

る既知損傷の大部分を該重砲の結果で驅逐隊が敵主戰艦隊に對抗し有效なる攻撃遂行の可能なるものありしも亦實に之に因る、如此觀察を爲したればとて強ち彼の敵戰艦隊に攻撃を加へ遂に獨をして全然英軍より回避を可能ならしめたる獨驅逐隊の殊勳を滅却するものではない。

是を以て戰艦及巡洋戰艦等の大軍艦は依然として今尙制海權の基礎である、恐らく今後も亦然りであらう、吾人は砲の口徑を擴大し速力を增進し吃水線の上下に於ける裝甲防禦を充分にし益々大艦の改良を行はなければならぬ。

叙述の意見に於てシエーア大將は一九二〇年三月十九日附を以て發表せられたる英國海軍政策中に明示せられたる如き

英國海軍省の意嚮を極力應援せるものと謂ふ可し、ジユトランド海戰に於て最醜劣を極めたるものはデフエンス及ウアリオー型によりて代表せられたる中巡洋艦型である、此等の艦が如何にして如斯醜態を呈し敵砲火に自らを暴露するに至れるや其明細なる理由の公表を見ない、只視界朦朧の故なりと記されたる而已である、晝夜兼行の大攻撃を行ひし割合に我(英國)驅逐隊は期待せられたるよりも比較的小被害にて退却し輕巡洋艦級は拔群の功を顯はしたと、嚮導驅逐艦と小輕巡洋艦に就ては兩型の合併に向ふ傾向あるようだ、直衝用としての驅逐艦は巡洋戰艦を凌駕するに足る適切速力の餘裕を有たなければならぬ此速力はジユトランドに於て充分なりしとは認め難いライオ

ン及其他の巡洋戰艦は其直衞驅逐艦の煤煙によりて屢々障碍を蒙つた、蓋し驅逐艦は其位置を支持する爲極度に其罐を强用せなければならなかつた、若し戰鬪にして引續翌晝間に及びたとせば恐らく驅逐隊は魚雷の缺乏を告げ遂に小型高速輕巡洋艦をして魚雷發射艦の職分を遂行せしむるの結果を生じたかも知れぬ、然れともジユトランド海戰は魚雷發射艦による夜襲の全問題に關しては午後九時過彼我兩艦隊の事實上の離散によりて之が教訓は豫期せられたるよりも多くはない。

兵資（マテリエル）

英國海軍省の要求せる兵資素質の高標準は海戰の全局を通じて曾に正當と認められたる而已ならず尙又兵資其自體も受く可き報償を得たりと云ふを得るが、推進機械の動作は凡て豫期以上の好成績を示し哨戒中の驅逐艦及輕巡洋艦は軸管又は張出承に考慮を拂ふ事無くして長距離進航の記錄を作つたのは關係當事者の孰も歎賞せる所である、只二個の弱點とせるは大戰の初期中に於ける(イ)復水器と(ハ)輕巡洋艦及驅逐艦罐である、前者の支障は其及ぼす影響重大で大艦は踵を接して之が餘波を蒙り必要なる修理中勢力の餘裕を減縮した、後者にありては一方罐管の腐蝕と一方ヤーロー式罐の下部水室の底鈑の機械的衰退に在る、戰時中の艦舶は平時に於けると全然其趣を異にし僅少の碇泊期間にて引續き長期に亘る强航は自ら之に伴

ふ支持處理法の考案を要するに至れるものがある、而して之が決定を見るに至れる迄は必要なる時に方り艦船の服務を一時的停止せるの例頗る多かつた。

近來は餘り多く聞かないが近年に於て屢々論議せらる所によれば外國の艦船で英國で建造せられたものは英國艦船に比して著く優れる點がある、是れ或程度迄主としてアームストロング會社に對し餘りに干渉しなかつたのに由るものであらう然れとも往時建造に係れるエルスウイク巡洋艦は決して現時の海軍省設計に劣つては居らぬ、然れども三隻の外國戰艦で大戰勃發早々土國より購入せるエヂンコート、エリン及智利より買收せるカナダは孰れも相當の變更を加へなければ英國海軍

省の要件を充すに足らなかつた、此等の艦は前希臘國巡洋艦チエスターパーケンヘッド前希臘及土國驅逐艦及四隻の智利艦導驅逐艦等戰爭の初期に方り英國に購入せられたるものと共に孰れも英國海軍の精銳に一段の有用なる力を添へた。

鋼線砲對無線砲の不斷的問題に關してはジユトランドに於る經驗は英國製設計の優越を確證する只一失敗の例はマールボローに在る、同艦に於ては多分砲身內に於て猛性爆發的徹甲彈の早發に基くものと見へ內部A筒は龜裂を生じ外套の分裂を來した、造砲上の報告は何等本公文書中に包含せられないから造砲上の情報を得る事僅少である、火管の缺陷に基く不發は屢々之を見たが何等の支障を來さなかつたようだ、各艦は孰れ

も口を極めて方位盤射撃裝置の價値を賞揚して居る此裝置は僅に主砲に應用せられたるに過ぎずして多くの場合之が裝置を見るに至れるは僅に最近の事である未だ曾て副砲に之が應用を見ない然るに獨り驅逐級艦の最初のものは既に之が應用を爲せる事は明である。

海戰の示せる各種の小細目中には新式の器械採用よりも寧ろ使用の結果現存兵器の改良の可能なるものある事尠からざるを示して居る、卽ちより早期に命中を加ふる爲現在測距機の改良の如き其一例である、此外の例は左の如くだ。

(イ)夜間視認法　夜間視認は明視の可能あるに非ざれば難事だ、蓋し誰何艦は若し對手艦にして敵艦なりとせば回答に

代ふるに齊發を受くるに相違ないからである。

(ロ)探照燈に關しては英の探照燈は獨のものに比して其力劣れるは承認せられたが、後者の燈は注意を加へて使用せなければ重大危險の原因となる虞がある、獨逸側は探照燈の補助として照明彈を使用した獨逸側探照燈は點火以前に操縱せられ目標探索に寸時も浪費する所無かつた、此等の探照燈は兩刃の武器にして往々之が使用を裏切り易い其一例は第三輕巡洋艦隊の夜戰に於て之を見た、サウザムプトン及ダブリンの兩艦は攻撃を行はんとて其探照燈を點火し却つて敵の猛撃を蒙つた兩艦の直後なるノッテンガム及バーミンガムは點火せざりしが故に敵彈を免れた。

(八)大艦の副砲彈藥の置場及燃燒防止並小艦の主砲裝藥燃燒防止の進歩せる方法の必要を感じ且小火災に處する爲濕水及排水施設の要ある事を見た。(終)

此處に左の如き挿話がある

回顧すれば大正七年頃で余が軍令部參謀時代の事である。或る日の午後三時頃、給仕が余の執務して居る室に來て「日高參謀！軍令部長(島村大將)がお呼びです、若し今急な用がなければ先般のジュトランド海戰のことを聞き度いから海圖を持つて部長室まで來て呉れる樣にとの事です」「今手放せない要務がありますが十五分位過ぎれば片着きますからそうしたらすぐ伺ひますと御返事をして置け」と給仕に申付け十分ばかりで用も片着いたので早速部長室に行くと「ソンナに急がないでも宜しかつたに、急な用と云ふのは片着いたか」、「片着きました」との

余の言を聞かれるや手づから椅子を進められて「其に掛けて君の好物の葉巻も有るから其れを喫ひながら、緩々話せ、聞かう」と云ふ事だ。

ソコデ余はテーブル上に海圖を擴げ艦型を配置し「今日までの諸情報を綜合すれば海戰は此の如くでありました、然るに英國ではジエリコー大將（大艦隊司令長官）の行動に非常な非難があり大將の辯明もあります、非難は云々大將の辯明は云々です」、此時まで軍令部長島村將軍は默然として熱心に聞いて居られたが突然口を開いて「其れに就て君はどう思ふか」と質問せられた、余は之に答へて「今日では諸種の事情が分明し居る爲めそうした非難も出るが其當時ジエリコーが大艦隊を率ゐて戰場に

到達した午後六時頃には濛氣四塞、敵味方の位置すら分らなかつたから右翼列に戰鬪展開しても相當理窟が立つし又ジエリコーの實際行つた如く左翼列の方に展開しても理窟がつきます」ソコデ余は茶目氣分を發揮し「部長！アナタが假りに位置を換へ英國大艦隊司令長官であつたならば此場合如何されますか」と逆襲してみた、島村大將は莞爾として微笑を湛へ「今夜一晩考へてみて明日返事しよう」と逃げらるゝので余はスカさず「今は一時一刻を爭ふ時です、トテモ、ソンナに待てません」部長「困つたナ……其れでは君を參謀長にしよう、ドーダ參謀長！」余「困りました」部長「ソンナに嘆息することはない斯うすれば宜しいではないか」と一本の鉛筆を卓上に立て「倒れた方に行き其

れから後は天祐に待つばかりだ」余「日本海軍の名將軍と言はれ青年將校渇仰の中心たるアナタまでが何の人事を盡す所なく唯天祐を待つと言はれたには少からず我々を落膽失望させまし た」と臆面もなく申したら將軍は「人事を盡して天祐を待つと云ふことはある、併し君は乃公が何にも爲さず唯天祐に期待して居る樣に言ふたが(顏面に微に微笑を帶ばれながら)乃公の參謀長には我海軍で名參謀と言はれて居る君が研究を盡し考に考を重ねて居るから充分人事を盡して居るではないか、其れは兎に角矢張りジエリコーの行ふた方が良い樣だ、今まで誰にも話をしたことが無く君に話すのが初めだが一體海上の戰鬪には敵を右舷に見て鬪はねばウソだ右舷戰鬪なら均勢ならば必

ず勝つし多少の劣勢でも戰利が得られる、乃公は中佐時代大學校の兵學敎官で古來幾多の戰例に就て研究を試みたが皆然りだ、君に聞くが某の海戰は如何か某の海戰は如何か」と矢繼早やの質問で恰も海戰鬼の試驗が始まつたようであつた。其れに一々答へて居る內に成程妙だナと考へる樣になつた、一體之は如何いふ理由ですか」と部長に反問すると、部長は「理由は不明だが古來幾多の戰例は雄辯に之を證明して居るのは今君が一々答へた通りだ之は海戰ばかりではない、試に銀座通りを散步しても同一だ自分の右側にある店は早く目につくが左側のものは特異の照明具でもないと見落すことがある」余「部長！眼の爲めではありませんか、失禮の樣だが皺腕みではありませんか」

部長「ナーユ其んなことはない先日不思議に思ふたから眼科の醫者に聞いてみたら其れは眼の爲めでは無く精神作用であらうとのことであつた」余「日本海々戰の事は日露戰史に書いてありますが同航戰にした理由や其他伺ひ度いものですな」時に午後四時近く日光はカーテンの隙間から斜に室内に射し込み、紫烟緩かに棚引く中に見れば百戰功成りし老將軍が沈思默考過去の追想に耽り、其前には年齒未だ熟さざる青年將校が將軍の口より洩れる一言一句も聽き洩らさじと耳をすまして傾聽して居る樣は眞に一場の劇的シーンであつた。將軍はやがて口を開いて「モー十六七年になるから記臆をして居らぬが、バルチック艦隊には第三戰隊が觸接して時々刻々敵の位置、針路速力等を無線で報じてよこした、其度毎に之を海圖上にトレースをして見ると結局我艦隊は北に位置し南西に向ひ、敵は南に占位し北東方に向つて居たので此儘で進めばお互に左舷を見せて航過することになるから、今日の勝利は偖てよなと考へた、併し君も知つての如く殿艦に居て氣はアセルが旗艦には加藤も居るし秋山も居るから拙いことを司令長官に進言もすまいし事が事だから幕僚にも話す譯に行かず獨り焦ら立つ胸を押へつつ居つた、心なき時計は兩國の運命を刻一刻と刻みつゝ午後一時五十五分になるや三笠は俄に左舷回頭で十六點の正面變換を爲し我艦隊は右舷戰鬪の對勢となつた、間もなく發砲を開始せよの信號が揭げられた、之れでこそ今日は素晴しい勝利が得

られると思つたから、傍の參謀を顧みて其れを言ふたが參謀は三笠の方を指して三笠はドーしたのか少しも發砲が出來ませんと多分砲の故障かも知れませんと言ふて頗る心配さうであつたが、三笠が單獨で闘ふのではないから三笠が發砲不可能でも心配は要らぬと頻りに敵の行動を注視して居る内遂に斯の如き奇勝を博すことが出來たのだ。」

「だから海上の戰闘は右舷戰闘に限る樣だ。」

「其れはソーでしようがジユトランド海戰には英軍は優勢でありながら而も今お話の右舷戰闘でも劣勢な獨軍に對しタイした勝利も得られません、五分五分位な戰果を得たに過ぎませんでした、之は如何なものでしようか」「君は先刻以來英軍の攻

擊精神を疑ふ樣な口振りであつたが、若し英軍に攻擊精神が旺盛でなかつたならばいくら右舷戰闘でも勝利は得られるものぢやないぞ、攻擊精神が旺盛であるならば劣勢でも勝利を得る例は幾何もある、然し物質と精神とは兩立しない否併行しないことが可なり多い、物質が充實すると却て精神が衰頽することがある、我海軍では近い内に八四艦隊が充實する筈だが攻擊精神が之に伴はず却て衰頽する樣なことが若しあつたら一大事だ、近頃世間の思潮を考へるとドーモ悲觀材料が多いのは遺憾だ、コンナ問題は佐藤中將や君などの方がお得意だから、講演などに出たらよく世人を警めて置くが宜い、おい退廳の鐘が鳴つたから、續きがあつたら又此次にしよう」。余は一禮して室を出

るとき島村將軍は聲をかけて「ジユトランド海戰の研究は尙續けて充分にやれ、面白い敎訓があらうぞ」余は軍令部參謀の職を奉ずること十有餘年であつたがコンナに愉快な日は無かつた、心の中にはジユトランド海戰の研究は是非繼續しようと誓つた。

淺學無識で事志と違ひ思ふ樣に研究が進まない內大正十一年病氣に犯され中途にして軍職を退かざるを得ざる樣になつた次第である。

昭和十四年十二月一日　再版印刷　ジユトランド海戰の研究奧付
昭和十四年十二月五日　發行　定價　三圓五十錢・送料　一四錢

發行所
海軍研究社
東京市麹町區內幸町二ノ二二
（電話銀座(57)一九二五番
振替東京七〇七六三番）

著者　日高謹爾
發行者　橋本正雄　東京市麹町區內幸町二ノ二二
印刷者　山田三郎太　東京市下谷區二長町一

凸版印刷株式會社印刷

御愛讀を奬めたい

海軍研究社の出版物

海を知れ

日本人は海國民であり乍ら、一般に海を知らぬものが多いといふ非難は、成程傾聽に價する警告である。最近海洋文學振興の運動が一連の文學者達に依つて盛んに提唱されてゐるが、それは結局海を知らぬ國民に海を知つてもらひたい熱意の迸りである。

日本人が海を理解することは、卽ち海洋國日本の發展を直接に大ならしめる最重要なる要因をなすものである。國防の充實も、海洋文化の發展も、國民大衆の海の理解なしには絶體に行はれない。

本社が進んで海洋關係の優秀なる出版物をドシ〳〵諸君の前に提供すべく計畫したのも、以上の如き見地に基いたものである。

諸賢よろしく海と共にあれ！

（以下出版部案內乞御高覽）

本社出版部案内

フオン・リヒトホーフエン手記　忽ち
海軍大佐　尾崎主稅譯　三萬部突破

戰時日本に贈る巨彈！

本書は歐洲大戰で敵機八十臺撃墜の超偉勳を樹てた獨逸飛行將校フオン・リヒトホーフエンの自傳兼空中戰闘記で、彼の生立ちから戰死直前に至る生涯を自ら筆をとつて世人に公にした秘錄で、讀物としてと同時に又偉大なる航空戰術の公開書でもある。

實に本書の價値は、歐洲の軍事專門家によつて、英國マカーデン空軍少佐の「英國空軍五ケ年」と共に、歐洲空軍關係出版物の雙璧として推奨されてゐるのを見ても、如何に偉大であるかゞ判るであらう。

増刷出來
四六版二百二十頁
定價　一圓三十錢
送料　十　錢

本社出版部案内

獨逸潛水艦の活躍

獲物をもとめて

海軍大佐　廣瀨彦太著

四六版二百四十頁（普及版）
定價　一圓二十錢・送料十錢

潛水艦は如何にして戰ふか？

歐洲大戰當時のUボートの活躍を柔く讀物風に描いて、獨逸潛水艦の全貌を傳へる興味横溢の書。

スリルに滿てる海洋讀物の王座

本社出版部案内

一九四〇年版 袖珍＝日・英・米・佛・伊・獨・蘇の軍艦寫眞帖

ポケット海軍年鑑

大艦巨砲、建艦競爭の時代―新艦が屬々と加はりつゝあり、且歐洲には既に海戰が行はれつゝある時、戰爭の決勝點を決定するのは海軍力だ。扨て列强の海軍力はどう？

定價は追つて發表致します

近刊豫告

日本軍艦集

帝國海軍の艦艇殆ど全部を網羅して一般向に編輯し、且誰にも判り易い解說がしてあるポケツト年鑑の姉妹篇です。

定價その他は追つて發表致します

御期待を乞ふ

318
544